國學院大學学術情報リポジトリ

第1次世界大戦開戦前夜：1914年7月のジャン・ジョレースの最期の闘争：サライェヴォ事件からジャン・ジョレースの暗殺まで

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 横山, 謙一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001653

第1次世界大戦開戦前夜：1914年7月のジャン・ジョレースの最期の闘争

――サライェヴォ事件からジャン・ジョレースの暗殺まで――

横　山　謙　一

はじめに――サライェヴォ事件までのヨーロッパでの国際情勢と社会主義インターナショナルの行動

1914年は第1次世界大戦が開戦した年であり、ジャン・ジョレースが長きにわたって世界的規模での大戦を阻止するために力の限りを尽くしてきた彼の努力が潰えた年であった。第1次世界大戦開戦直前のこの年の7月31日に彼は暗殺される。まさに戦争直前の暗殺であり、それ故か彼は「大戦最初の犠牲者 première victime de la guerre」と呼ばれる。この時代の歴史を研究するもののうちで、彼が1914年7月末まで第1次世界大戦の勃発を阻止するために後生の人々の記憶から消えることのない懸命の努力をしたことを否定するものはほとんどいない。特に社会主義インターナショナル・シュトゥットガルト大会は国際社会主義インターナショナルの転換点となった。最終的には国際紛争に対し、戦争を阻止するための決議はベーベル決議案とヴァイアン - ジョレース決議案が折衷された決議が可決されそれを主導したフランス社会党 SFIO の威信は高まり、ドイツ社会民主党 SPD と肩を並べるまでになった[(1)]。その後も独仏の党の対立と確執は続いたが、あらたにレーニンに率いられるボリシェヴィキやローザ・ルクセンブルクとカール・リープクネヒトのドイツ社会民主党左派などの左派が、旧来のインターナショナル内の右派・中間派と対抗する勢力として台頭してきた[(2)]。1907年のシュトゥットガルト大会以降戦争の脅威が高まっていった。オーストリアによるボスニア - ヘルツェゴヴィナの併合は戦争の恐れを高めた。1910年にコペンハーゲンで開催された第8回社会主義インターナショナル大会は戦争阻止の手段を具体化するために、再び軍国主義と軍

縮の問題を議事日程に掲げた。国際社会主義事務局 BSI はこの大会の招請状に「シュトゥットガルトでインターナショナルは反軍国主義的行動の指導方針を跡づけたが、コペンハーゲンではその理念を実現する手段を見いだすことが重要である[3]」と明記した。独仏両党の基本的見解の相違はあらたに「戦争を阻止するあらゆる手段の中で、大会はとりわけ戦争に手段を与える産業（武器、軍需品、交通手段その他）における労働者のゼネラル・ストライキとともにもっとも活動的な形態のもとでの民衆の騒擾的行動と活動が際だって有効であると考える[4]」とするケア・ハーディーKeir HARDIE[5] －ヴァイアン決議案をめぐって激しく対立し、ドイツ社会民主党の猛烈な反対でこの決議案は次回大会まで国際社会主義事務局 BSI で検討するとして先送りされることになる。コペンハーゲン大会以後に国際情勢はさらに悪化してモロッコでのアガディール事件、イタリアによるトリポリタニアの侵略と占領、バルカン戦争と一触即発の危機が相次ぎ、バルカン戦争の危機に直面した社会主義インターナショナルは1912年にバーゼルで臨時大会を開いて対処しようとし、バーゼル宣言が出されたが、根本的解決策にはたどり着くことが出来なかった。そして戦争を阻止するための究極的で最終的決議の決定は1913年のウィーン大会にまたも持ち越されることになった。しかしコペンハーゲン大会で1913年に決定されたこの大会の開催は、1914年8月に延期される。1912年8月末の国際社会主義事務局 BSI の会議で、ファン・コル VAN KOL らオランダ代表[6]の提案で緊急性を要する問題がないのでインターナショナル創立50周年記念行事にあわせて1914年に延期する提案が出され、ドイツ、オーストリアなど過半数を少し超える賛成で可決されたからである。この延期の提案には前大会の満場一致での決定を覆すことへのフランス、イギリスなどの激しい反対があった。この延期の本当の理由はチェコとドイツの党の対立があり冷却期間が必要であると、カミーユ・ユイスマンス Camille HUYSMANS[7] はヴァイアンに書簡で書き送っている[8]。1912年秋には戦争の脅威はさらに重大化し、同年10月28日に国際社会主義事務局 BSI の総会がブリュッセルで開

催される。このときは病気で会議に出席できなかったベーベルも、ドイツの代表たちにウィーン大会の延期を放棄することもやむなしと認めていた。会議が開かれたとき、バルカン戦争は山場を迎えていた。ヴァイアンはインターナショナルの緊急の行動を求めた。一方ジョレースはウィーン大会が延期されたことに遺憾の意を表しながら、1912年のクリスマスにバーゼルで臨時大会を開き、ウィーン大会を1914年に延期することを了承した。この大会に先立ち同年11月10日と17日にはインターナショナル加盟の各党がヨーロッパの諸都市で平和集会を組織した。友党のためにジョレースとレンナーRENNER はベルリンで、マクドナルド MAC DONALD やヴァンデルヴェルドはパリで演説し反戦の決意を表明した。

前述の1912年10月28日に国際社会主義事務局 BSI の決定に従って臨時大会の決議案を作成するためにジョレース、ケア・ハーディー、ヴィクトル・アドラーVictor ADLER[(9)] などからなる委員会が作られたが、決議にはあくまでインターナショナルの団結を対外的に示すことに強く留意されたために、ゼネラル・ストライキの文言は決議案には盛り込まれなかった。ヴァイアンはそのかわりにウィーン大会まで各国支部がこの決議案を検討することを求めた。しかし4党からしか回答がなく、1912年4月18日にヴァイアンはさらなる回答をユイスマンスに急き立てた。同年5月8日には圧力をかけるために、直接労働組合組織に意向を確かめるよう求めた。フランス労働総同盟 CGT はゼネラル・ストライキと蜂起を戦争に対置する立場に立っていることをヴァイアンは強調した。国際情勢が深刻化したことをうけてバーゼル臨時大会は1912年の11月24・25日に前倒しされた。この大会ではバルカン半島での危機に警鐘を鳴らし、各国支部への精力的な反戦平和運動への取り組みと、特にバルカン半島の社会党がこの危機に対して行動を起こすことをもとめる「バーゼル宣言（後に「インターナショナルの宣言」として知られることになる）」を可決して閉会する。結果的にバルカン戦争の危機がヨーロッパ全体に拡大しなかったことに社会主義インターナショナルは安堵する。そして1911年と1912年の危機を、1913年春に

はジョレースを含めバルカン半島の危機は一段落がつき、全面戦争の危機は去ったと観測した。また戦争を阻止する社会主義インターナショナルの自らの力量にも自信を深めた。

しかしその楽観論には陥穽があった。社会主義インターナショナルの国際情勢を分析する手段は、通信社の至急電報と関係各国の社会党指導者が伝えてくる情報の2つに限定されていたのである。政府の中枢に関する情報は社会党代議士には伝わってこなかったのであり、オーストリアのアドラーからの情報は楽観論を振りまくことになる。その情報の欠落は1914年7月に大きな波紋と混乱を呼ぶことになる。

警戒心をゆるめていなかったフランス社会党 SFIO は再びバルカンは半島での情勢が悪化すると、フランス社会党常任執行委員会 CAP で1913年2月19日に情勢分析し、各国の軍備強化により危機はかつてないほど悪化していると結論を出し、ジョレースとゲード、ヴァイアンに出来るだけ早く国際社会主義事務局 BSI の会議を開き現在の危機的な情勢の下でバーゼル大会において決定された戦争阻止のために緊急行動をとることと、軍国主義的帝国主義への攻勢と、とりわけ独仏の新たな軍備拡張に対して採るべき諸措置を検討することをもとめるように要請した[(10)]。この提案はドイツ社会民主党執行委員会とオーストリアのアドラーにも伝わるが、彼らはこの会議の開催は必要ないと判断した。アドラーはどの列強も、特にオーストリアは経済的財政的破綻をもたらす戦争をのぞんではいないと回答した。ドイツとオーストリアの社会主義者もフランス社会党の常任執行委員会も、1913年3月初めにはバルカン危機は終息に向かい、少なくとも局地化され、イギリス、フランス、ドイツの西欧列強の大国間の接近と和解の時代が始まると判断した。1911年と1912年の重大な危機の時代はおわったと社会主義インターナショナル内部にも楽観主義の流れが生じた。戦禍が経済と財政にもたらすであろう破綻からして列強は和解と漸進的全面軍縮に向かうであろうとする見解は、ウィーン大会のために準備した文書からも伺える。しかしジョレースは全面戦争回避されたけれど「事態の根底を

見れば危機は今ほど深刻なときはない[11]」と主張した。間もなく第2次バルカン戦争が起きたが、地域紛争にとどまって、ヨーロッパ全体の平和を脅かすことはなかった。ジョレースにも平和を守る国際的行動を放棄しなかったフランス社会党 SFIO にも楽観論の潮流は影響を与えた。この戦争の危機を乗り越えたという彼らの抵抗する能力への自信は強まった。ジョレースは平和のために貢献するドイツ社会民主党 SPD を賞賛した。ジョレースは独仏の両党が、そして両国のプロレタリアートが平和への圧力であるばかりか平和の保障であり、独仏両国の和解をもたらす勢力となるとまで考えた。1913年3月1日の共同宣言は多くの関心を引き寄せた。

第１章　サライェヴォ事件から第1次世界大戦開戦までの国際情勢と社会主義運動

急激に国際関係を悪化させヨーロッパを戦争の脅威が脅かすようになるのは、1914年6月28日のサライェヴォ事件であった。同日ボスニアのサライェヴォでオーストリア＝ハンガリー皇帝権継承大公フランツ・フェルディナント夫妻が暗殺された。6月28日から7月24日までフランスに不安の浪が押し寄せる。ポワンカレ大統領はロンシャン・グランプリ競馬の帰りにこのニュースを受け取る。しかしロンシャンに集まったような群衆の関心はカイヨー夫人裁判で持ちきりであった。彼女はそして釈放される。とはいえ人々は戦争の危機への不安はぬぐい去れなかったが、ドイツ皇帝がヨットでヴァカンスの旅に出かけ、人々は不安の胸をなで下ろした[12]。

サライェヴォ事件は当初比較的に冷静に受け止められていた。少なくとも世界大戦に行き着く大事件になるとはほとんど予想されていなかった。その理由は各国で政治要人の暗殺が相次いでおり、ましてバルカン半島では2度のバルカン戦争のような危機が相次ぎ、こうした事態がいつ再発しても不思議がない情況であったからだ。そして社会主義インターナショナルはこうした危機的事態に対処してきたという過信もあった。すでに1913年にベルギー王アルベール1世がポツダムを訪問した際に、ドイツ皇帝は

ベルギー王に「フランスとの戦争は不可避で間もない」、対独復讐を掲げるフランス共和国政府と国民は「3年兵役法が議会で可決されてから次第に攻撃的になってきた」と語ったと、そしてベルギー国王は「フランスが好戦的であるとのイメージは皇帝の想像にすぎない」と反論したと、ベルギーのベルリン領事が同年11月にフランス外務省のジュール・カンボン Jules CAMBON[13] 外務次官に伝えてきた[14]。しかしドイツが事前に戦争を計画していた証拠は公文書では残されていない。

暗殺の犠牲者であったフランツ - フェルディナント皇位継承大公は前の継承大公の情死事件やそれを受け継いだ父親の死などいくつかの偶発的事件で皇位継承権を手にしたオーストリア大公であったし、当時のオーストリア皇帝は老齢ではあっても1916年まで健在であった。フランツ - フェルディナント皇位継承大公の妻であったゾフィー・コーテク Sophie CHOTEK は身分の低い出自であるとして皇室や政権中枢からは好意的に受け止められていなかった。しかしサライェヴォ事件はオーストリアにとって、セルビアをはじめとしたバルカン半島のパン - スラヴ主義に制裁を加え好機だと受けとめられたのである。オーストリア側からのセルビアに対する強硬な態度は、セルビアの後見者であるロシアの態度をエスカレートさせた。両者の部分動員から総動員にいたるとどまることのない瀬戸際政策の競争は、結果的には欧州に破滅的戦禍をもたらす世界大戦へと導いた。その短期間の情勢の悪化は、社会主義インターナショナルならびにジョレースの予想を超えた速度で押し寄せる怒濤のようにヨーロッパをそして世界を飲み込んだ。まさに手を尽くす時間もないままに大戦へと突入したと表現するべきであろう。ジョレースは当初、戦争が阻止できないのであればやむなく紛争の局地化をのぞんだ。最終的にはジョレースが期待をかけたイギリスの仲裁さえも功を奏さなかった。

7月の間じゅうパリにはウィーンとベルリン間の決定については何も伝わってこなかった。5か月前から準備されたポワンカレ大統領とヴィヴィアニ首相のロシアとスカンジナビア諸国への訪問の旅は中止されなかっ

た。7月16日に彼らはダンケルクをたってクロンシュタットへむかった。7月20日にロシア皇帝のヨットがクロンシュタットで2人を待ち受けていた。しかしサンクト・ペテルブルクにはセルビアからのいくつかのニュースが届いていた。同月23日夕べ彼らはロシアの軍港クロンシュタットを発ってスウェーデンに向かった。この出発を待ってオーストリアは周到に準備されドイツに支持された最後通牒を送った。午後6時のことであった。ウィーンは犯人の処罰と民族主義プロパガンダの中止とセルビアでの捜査へのオーストリア警察の参加を要求した。48時間の猶予をセルビアにあたえた。フランス号の船上にいたフランスの大統領と首相は無線電報でこのニュースを知った。スウェーデン訪問は中止しなかったが、デンマークとノルウェー訪問はキャンセルした。7月29日までフランスには大統領も首相もいなかった。共和国大統領代理にビアンヴニュ-マルタン BIENVENU-MARTIN 国璽尚書がついていた。彼は引き受けなければならない任務の重大さに困惑した。24日朝にドイツ政府の「紛争の局地化」の方針を21日朝の覚書を自国政府に送ることを列強各国のベルリン駐在大使館はもとめられた。フランスではビアンヴニュ-マルタンが「局地化」方針を歓迎し、ヴィヴィアニの帰国を待った。より大きな利害関係を持ったロシアは、7月24日にオーストリア-ハンガリーのセルビア侵攻を許さないと声明した。そしてさらに24時間の猶予をもとめた。7月25日18時にセルビアはオーストリア警察の捜査への参加を除きオーストリアの最後通牒を受け容れると答えた。これをオーストリアは拒否と受け止めた。セルビアは総動員令を出し、オーストリア-ハンガリーは8個軍団の動員令を出した。わずかの間に大方の予想を超えて事態は悪化し、ヨーロッパでの戦争は目前に差し迫る。7月26-27日にヨーロッパはまだ望みを捨てていなかった。ドイツは局地化をのぞみ、他国はオーストリアの態度緩和をもとめた。(15)

ジョージ5世は7月25日にいとこに当たるプロイセンのハインリッヒ・フリードリヒ・ルートヴィッヒ Heinrich Friedrich LUDWIG 大公（ドイツ皇帝の弟）に「これの外にとどまるために出来ることはすべておこなうで

あろう」と書き送った。ドイツのフォン・シェーン駐仏大使（元外相）は7月26-27日にフランスがロシアに態度緩和 modération をもとめるようにこころみた。フランスは逆に大使にオーストリアの態度緩和を促すことをもとめたが、ドイツはこれを拒否した。同月26日、イギリスのエドワード・グレイ外相はこの問題解決のために4カ国会議にゆだねることをもとめた。しかしドイツのベートマン - ホルヴェーク宰相はこれを拒否した。最後にロシアとオーストリアの直接対話が行われたが、同月28日にオーストリアはセルビアに宣戦布告した[16]。7月29日から31日にかけてはロシアがどう動くかが注目の的となった。7月28日にはツアーリ（ロシア皇帝）は13個軍団の部分動員を命じた。29日、ヴィルヘルムの妥協的意図を信じてニコライは電文を交換した。30日朝にツアーリはセルゲイ・サゾーノフ外相に屈して総動員令をだしたが、これにフランスは同調しなかった。ドイツにとってロシアの総動員令は戦争を意味した。23日から29日までは主としてオーストリア側が、29日から31日にかけてはロシア側がイニシアティヴをとった。1906年のシュリーフェン・プランにしたがって、ドイツは二正面作戦を実行に移す。ドイツは最初にフランスを撃破することを意図した。同月31日11時30分にオーストリアが総動員令を発動した。ドイツは8月1日正午までの12時間の猶予で総動員令を取りやめるようもとめる最後通牒 ultimatum をロシアに出し、加えて中立にとどまるようもとめるもう一つの最後通牒をフランスに出した。8月1日15時45分にフランスの総動員令が発せられる。すでに万一の衝突を避けるために、フランス軍は30日から国境から10キロメートルの距離を確保するよう命令が出されていて、これが守られていた。ドイツは8月1日19時少し前にロシアに宣戦布告した。ドイツ皇帝の「ところで我が軍は東だけに進軍するのか」との問いにモルトケ参謀総長は答えた。「我々は完全な混乱に陥らないために、すでに定められているとおりの流れに沿って、ロシアの側は防衛するに足りるすくない兵員のままで、フランスの側に集中して大軍で進軍します」[17]。8月3日18時15分にドイツはフランスに宣戦布告した。口実は度重なる国境侵犯とフラ

ンスの航空機によるニュールンベルクへの爆撃であった。それは正確でなかった。フォン・シェーン大使はフランス側の工作でゆがめられた電文しか受け取れなかった。8月2日からドイツ側による国境侵犯が多数おこなわれ、同日にはルクセンブルクにドイツ軍は入った。2日夕になってはじめてベルギー政府は軍の通過をもとめるドイツの最後通牒を受け取った。3日朝にベルギーはこれを拒否した。[18]

3日夕べにイギリスはベルギーの中立が侵犯されたならばという条件で同国への援助を約束した。もしイギリスが中立の立場に立ったならばフランスは破局に追いつめられたであろう。7月30日から8月2日までのフランス外交の努力はイギリスの保障を得ることにあった。7月30日にポワンカレはフランシス・バーティー駐仏英国大使に確約をもとめたが、拒否された。31日にジョージ5世にポワンカレは書簡を書いた。しかし8月1日にいたってもイギリスの閣議は意見が割れて決定は行われず、様子見の状態であった。8月2日にルクセンブルクが侵犯され、ロシアに宣戦布告してはじめて、グレイ外務大臣とチャーチル海軍大臣は自国の政府からフランス海岸に対するドイツの行動を許容しないとの宣言を獲得した。8月3日の午後7時少し前にフォン・シェーン大使はヴィヴィアニ首相に宣戦布告した。かくして第1次世界大戦は開戦する。[19]

第２章　世界大戦の危機とジャン・ジョレースの平和のための行動

開戦の危機が深刻に受けとめられ、不可避となったと思われた彼の暗殺の直前の7月30日と7月31日にあくまで開戦を阻止することを断念しなかったか否かという議論は、暗殺以降長く続けられてきた。それどころか彼は非の打ち所のない愛国者であり、生きていたならば祖国の防衛戦争に尽力したであろうという断定的な予想さえまことしやかに語られた。それは一つには開戦直前までのジョレースとともに平和を追求し、戦争を阻止しようとしたが、開戦するとすぐに「神聖同盟 Union sacrée」という名の下に戦争に協力した社会主義者たちの自己弁護であった。

そして暗殺されずに彼が生きていたならば、開戦後にどのような立場をとったかについて様々な議論が行われた。ゲードやマルセル・サンバ Marcel SEMBAT[20]、アルベール・トマのように「神聖同盟」の政府で大臣のポストを引き受けたであろうか？あるいは政権の外に身を置いてガンベッタのように国民の決起を呼びかけたであろうか？国防の先頭に立ちながら、分裂したインターナショナルの再建につとめたであろうか？それとは反対に戦争から社会革命を生み出すために蜂起を呼びかけたであろうか？ 1917年にブリアンとカイヨーの和平交渉を支持したであろうか？クレマンソーの強圧的徹底抗戦主義に反対する危険を冒したであろうか？ロシア10月革命とブレスト - リトフスク講和にどのような態度をとったであろうか？では第3インターナショナルに対してはどうであったか？彼の「新しい軍隊 l'Armée nouvelle」構想や3年兵役法反対闘争のフランス軍への影響をどう見たであろうか？

これらの問題については熱烈に議論された。これらの問題は彼の暗殺後には彼が生きていたならば、暗殺されなかったならばという仮定でしか解答を出せなかった。しかし6月28日のサライェヴォ事件から7月31日の彼の暗殺までの彼の最後の闘争についての評価について、彼が最後まで彼の意志を断念しなかったか否かについては議論の余地が残されるとする論者もいる[21]が、暗殺直前にジョレースの話を聞いた友人たちはすべて最後まで戦争を阻止するために闘うと断言するのを聞いている。

一方彼を暗殺した側のラウール・ヴィラン Raoul VILLAIN[22]についても議論は尽きない。彼は外部と関係を持たなかった半ば精神を病んでいた孤立した人物であったのか？極右団体「アクション・フランセーズ Action Française」の影響を受け、ロシアの大使やドイツの情報機関に操られた国粋主義者であったのか？なぜ彼が重罪裁判所に出頭するまで56か月もかかったのか？たった1フランの損害賠償をもとめた民事裁判（付帯私訴）がジョレースの弁護と審理のために必要とされたのか？暗殺者ヴィランが無罪放免にされたのはなぜか？スペイン内乱時のヴィラン殺害は計画的で

あったのか、運命的偶然であったのかも議論されている。

本論は基本的にサライェヴォ事件からジョレースの暗殺までの彼の政治的活動を跡づける作業を目的とするが、ジョレース暗殺後の事態の展開とジョレースに対する評価の推移についても、ジョレース暗殺の政治的意味を評価する上で必要な限り本論で取り扱う。

サライェヴォ事件以降のジョレースの対応をここから詳述したい。

第１節　ジョレース最期の3つの演説――ロシュフォールの演説、ヴェーズの演説、ブリュッセルのシルク・ロワイヤルでの演説――

サライェヴォ事件以降のこの時期にジョレースが戦争の危機をいかに受けとめたかを鮮明に表明した3つの演説がある。それらを日付順に挙げれば第1に7月5日の「ロシュフォールでの演説」であり、第2に後世で最も議論を呼んだ7月24日の有名な「ヴェーズの演説」であり、最後に7月29日にブリュッセルのシルク・ロワイヤルでおこなわれたジョレース最期の演説である。第1の演説は1914年の総選挙でシャラント・インフェリウル県での最初の社会党代議士プーゼ POUZET の当選を祝う祝賀会での演説であり、当時の首相であり、かつてはフランス社会党の代議士であったヴィヴィアニに一定の信頼を明らかにし、この政権への社会党の協力による平和の維持と戦争阻止の可能性を表明した。第2の「ヴェーズの演説」はフランスの政権の国際紛争への関与と責任について指摘した演説として後世で多くの議論を呼んだ。第2節で述べる「ベルギーのシルク・ロワイヤルの演説」は、オーストリアとロシアの戦争の企てを断罪し、特に秘密条約によるフランスのロシアとの同盟について警告し、フランス国民はこの秘密条約に拘束され強制されるべきではないと説いた。

当時社会主義インターナショナルでは1914年8月23日に予定されていた社会主義インターナショナル第9回ウィーン大会の準備と差し迫る戦争への対応とが入り交じって議論された。ウィーン大会を開催して戦争阻止のための態勢を整えなければ充分に戦争の脅威と戦えない。しかし大会開催

を戦争の勃発が不可能にしようとしているが、時期を早めてでも大会開催にこぎ着けようとジョレースを含めた社会主義インターナショナルの指導部は懸命に努力する。まずはサライェヴォ事件直後の6月30日に列強の諸国に紛争を拡大させないように働きかけることを求めるアピールをジョレースは「ユマニテ Humanité」紙に掲載した。7月5日にはフランス西部の海軍軍港の町ロシュフォール Rochefort で以下のような演説を行う。演説の最初にロシュフォール最初の社会党代議士プーゼの当選を祝う挨拶の言葉から始まっている。

「市民諸君。私はあなた方の心のこもった歓迎にとても感動しており、私にくださったお褒めのことが身に余るものであっても闘いの場での心底からの共感と深く結びついた仲間の集まりから出されたことを感じてお受けいたします。私たちのように組織された党の人々は賞賛に酔っていることは出来ず、その諸個人は自覚へと至るプロレタリアートによって組織された大いなる集団的行動にのみ価値を見いだすのであります。これは、市民諸君、組織された労働者の集団的な力で今回の選挙に我々がおさめた勝利を歓迎するのであります」。

「もし我ら社会主義者が敵対者が主張するように祖国の敵であったならば、フランスの背信者であったならば、彼らが言うようにファショダの時にはフランスをイギリスに売り渡そうと準備し、次にはドイツに売り渡そうとし、もし社会主義の人々が特権を祖国とはき違える恥ずべき中傷者が言うように祖国の軍港を侵略に開く準備をした裏切り者の集団だとしたならば、ルノーデル RENAUDEL（代議士）によってトゥーロンの一部が社会党の手にわたり、プーゼによってロシュフォールが社会党にわたり、グード GOUDE によってブレストが社会党にわたったのを見なさい。しかし非常識な彼らは、フランスのすべての軍港はその住民自身によって侵略の危機にさらされていると言うのです。何と敵対者はフランスを防衛すると言い立てながら、我々に対するあらゆる侵害行

為 attentat を励ますかのように軍港の人々はそれを危険にさらしていると外国に向けて繰り返し言うのです。彼らこそフランスを弱体化させているのです。我々はこれらの惨めな中傷を跳ね返します。我々は国防を弱体化させるのではなく、反対に最も強固で広範な基礎の上に、物質的精神的力の最も堅固な根本の上に国防を組織しようとのぞむのであります」。

「10年この方今年ほど戦争が間近いとの噂が広がった年はありません。タンジェ、カサブランカ、アガディール、ボスニア - ヘルツェゴヴィナ、トリポリタニア出兵、バルカン戦争と警鐘をならす危機が相次ぎ、そこでは軍隊全体が銃弾ではなくチフスやコレラで死に追いやられています。どの瞬間にもどの刻にも人々は諸国民が地平に問いかけ戦争に召集されなければと自問しています。死よ！どうして何千も我々をむさぼり食うのですか。いったい何の資格で、何をのぞんでいるのですか、と。すると秘密条約があると死はいいます。ばかげた体制です！」

「不幸なことにこの問題について最も挫けてはいけない最初の日に彼は挫けたのです。国防体制の組織についての軍事綱領についてヴィヴィアニ氏は賛成と言いましたが、現在では兵役の短縮について検討していません。法律は法律で私は実施するでしょう。1915年に兵役年次クラスすべてを兵役から解放しません。なぜなら兵役年次クラス全部だからであり、彼は兵役から解放されるのは一兵役年次クラスだということを彼はわかっていません。しかしついに彼はその兵役年次クラスを保持するといいました。バルトゥーBARTHAUD[23]氏がすでに通告したように」。

「私はここでいたるところで私たちが言い続けたことを繰り返します。そうです。我々は独立した党を、ほかの政党と混同されない自律した党を構築したいのです。我々が権力を引き受けるために十分に強力になると党全体が宣言する前に混成内閣で権力の責任を引き受けたくないのです」。

「私たちはどんな混乱をものぞまず我々自身の党であり続け、留保な

しに弱点なしにプロレタリアートのために闘いたい党がどこにいるかをプロレタリアートは知っているのです。しかし他と区別され自律し教義と戦術と綱領を持つ党であると同時に、すべての誠実な共和派にすべての善意の急進派に正義と進歩と改良の達成のために、あなた方は社会党の献身と協力を頼りに出来ると言いたいのです。もし議会で、ある政権が内政で社会正義の貢献を、外政で国際和解の貢献を企図するならば、もしこの政権がこの貢献を成し遂げながら社会党に反動の怒りを訴えるならば社会党はこの政権を救うでしょう。このことは我々がアミアン大会で宣言し選挙期間を通して我々が言ったように急進党が第2回投票で共和派の義務を果たしたこの地域の急進共和派を先ほどプーゼが賞賛したのは正当であるとしたならば、我が国全体で反動派に敵対して第1回投票で首位に立った40名の社会主義者の決定的勝利を確かなものにしてくれた民主的共和派を賞賛するのが正しいとしたならば、もしこれらの人々を賞賛するのが正しいとしたならば、議会で左翼の急進党には100議席以上の彼らを補う社会党の票があることを思い起こさせる権利を持つのであります」。

「そして選挙直後に議会が招集された時、社会党は最初の審議で議事日程として彼らの政策を立案しました。同党は共和派に進め、前進しよう、大胆かつ熱心に取り組もうと言いました。…そしてポワンカレ氏は彼らにリボ氏、ペイトラル PEYTRAL 氏、デルカッセ氏を（首相として）提案しました。議会は同意せず同日内閣は倒れた。第2次ヴィヴィアニ内閣が翌日から樹立されたが、その迅速さからして私は舞台裏で準備されたのではないか、ポワンカレ氏（大統領）は成熟したヴィヴィアニに頼る前に老獪なリボ氏に打診を試みたと彼は言ったではないかと率直に自問しました。しかしプーゼが先ほど言ったようにヴィヴィアニ内閣はリボ氏の色褪せたニュアンスの綱領を借りたように見えました。ブリアン氏に対すると同じ次元の不平不満でヴィヴィアニ氏を手厳しく語ろうとは思いません（「ブリアンを倒せ」の声。拍手）。多分彼もまた同様に

大きな過ちを犯しました。私はそれを大きな失策だと思いますが、すぐに我々から立ち去る過ちでありました（拍手）。本質は上に向かう過ちであり、下に落ちる誤ちではないと思います。彼の用心深く穏健な社会主義的政策と彼がかつて左翼の人物であったことを思い起こさせる彼の政府の政策の間には大きな乖離があります。大きな精神の平静さと全体的判断の明晰さによってヴィヴィアニ内閣は左翼に位置し、民主的改革の精力的な行動を決めることを我々は望むであろうことを私は打ち明けます[(24)]」。

このロシュフォールでの演説でジョレースは社会党が国防の敵対者ではなく熱心な国防を支持する擁護者、愛国者であると宣言する。彼は差し迫る戦争の脅威とバルカンでの戦場での兵士の惨状に目を向けることを呼びかける。当時の首相ヴィヴィアニが3年兵役法に対して廃止して2年兵役制に戻そうとしなかったことを責めているが、ヴィヴィアニが3年兵役法を廃案にする勇気を持たなかっただけであるとして、3年兵役法を積極的に支持して急進党にさえ敵対したブリアンとは区別して、最後までヴィヴィアニの平和を維持しようとする努力に対して信頼を失わなかった。また戦争を阻止する政権の一翼を担う準備があることを彼は宣言した。ここで今日までその可能性が注目されてきた平和主義者カイヨーとの連立政権やこのヴィヴィアニ左翼政権とジョレースの社会党が連立政権を構築し、噂されたジョレースの外相就任が実現していたならば、アガディール事件の時のように瀬戸際での交渉による、あるいは仲裁による戦争回避ができなかったかとの憶測が可能である。しかし現実には連立内閣は「神聖連合」のもとで、歴史の皮肉にも最も強固な入閣政策反対者であったゲードとマルセル・サンバの入閣によって開戦後に実現したのである。

同月7日には代議院の短い演説でポワンカレ大統領とヴィヴィアニ首相のサンクト - ペテルブルグ訪問の予算に反対し、ロシアでの革命に反対する介入の約束に警戒を呼びかけたが、それ以上は語っていない。同月14日

から16日にかけてウィーン大会でのフランスの党の立場を決定するためにフランス社会党臨時パリ大会が開催され、ジョレースはこの大会に提案される戦争が差し迫った際に軍需関係の産業でのゼネラル・ストライキを提案する「ケア・ハーディー- ヴァイアン修正案」を擁護し、ゼネラル・ストライキに反対するゲード派の案に対抗して賛成1,690票対反対1,174票でジョレース案を可決させている。直後の18日の「ユマニテ」紙には保守派の非難に答えてウィーン大会に提案されるゼネラル・ストライキは対立する双方の国で同時的国際的に組織されるストライキであって、さもなければ実施されないし、係争事項は国際的仲裁にかけられる。我が党は開戦の際には国民国家の独立を擁護すると反論した。同月23日にオーストリアの覚書が出されるが、その内容はセルビアに条件の全面的の受諾をもとめるものではなく、セルビア側の妥協可能な内容であったと解釈され、ヨーロッパはまだ安堵していた。

そのあと開戦の2週間前の7月24日に有名な「ヴェーズ Vaise 演説[25]」をジョレースは行う。彼はその演説で次のように述べた。そしてフランスの責任についても次のように指摘した。

「市民諸君。我々は過去40年このかた、私が今夕あなた方に語りかける責任を持つこの状況ほどヨーロッパが危機に脅かされ悲劇的な時はありませんでした。そうです市民諸君。私はこの絵の陰鬱な色彩を強めようとはのぞみませんし、私たちが半時間前にニュースで聞いたオーストリアとセルビアの外交の決裂が必然的にオーストリアとセルビアの戦争が起きることを意味すると言う気はありませんし、オーストリアとセルビアの戦争が起きたならばこの紛争は必ずやのこりのヨーロッパに拡大すると言うつもりはありませんが、しかし今現在我々に対して平和に対し人命に対し恐ろしい可能性が生じており、この可能性に対してヨーロッパのプロレタリアは出来る限りの至上の連帯の努力を試みなければ

なりません[26]」。

「市民諸君。オーストリアがセルビアに宛てた通牒は脅迫に満ちています。もしオーストリアがスラヴの領土を侵略し、もしゲルマン人がゲルマン民族のオーストリアがスラヴ世界の一部であり、スラヴ民族のロシアが深い共感を示しているこのセルビア人に暴力を加えたならば、ロシアが紛争にくわわるおそれがあり、予想できます。もしロシアがセルビアを守るためにオーストリアに敵対して介入するならば、セルビアとロシアというふたつの敵に直面し、ドイツと結んでいる同盟に助けをもとめるでしょう。ドイツは大使を通じてすべての列強にオーストリアと連帯していることを通知しています。もし紛争がオーストリアとセルビアの間にとどまらずロシアが介入すれば、オーストリアはドイツが自分の陣営に加わるのを見るでしょう。そしてオーストリアとドイツの同盟条約だけがこの紛争劇に入るのみならず、ロシアとフランスを結びつけている秘密条約のよく知られている重要条項があって、ロシアはフランスに『我が国はドイツとオーストリアという2つの敵国が敵対しており我らを結びつけている条約に助けを求め、フランスが我々の陣営に加わらなければならない』と言うでしょう。われわれは今現在オーストリアがセルビアに襲いかかろうとしており、一方オーストリアとドイツはセルビアとロシアを攻撃しようとしている前夜にいます。そうなればヨーロッパが戦禍につつまれ、世界が戦禍に見舞われます。こうした重大な時機に、我々の前にそれぞれの祖国の前に全面的な危機がある時機に、私は責任について長々と探そうとはのぞみません。我々は我々の責任を持っています。(中略)モロッコに軍事力でそして武力で浸透すれば、ヨーロッパに野望と渇望と紛争の時代を開き、我々は悪しきフランス人と非難してきたし、我々は心配してきました。（中略）各国民は小さなたいまつを手にヨーロッパの街路という街路にくり出しています。今戦火がすぐそこにあるのです。我々には責任の一端がありますが、しかしその責任があるからといって他国の責任を隠し立てはしないし、一方でドイ

ツ外交の狡猾さと狼藉ぶりを、他方でロシア外交の二枚舌を非難する義務を我々は持っています。（中略）嵐の暗雲が我々の上に立ちこめている時、この犯罪が実行されないことをいまだのぞんでいます[27]」。

「市民諸君、嵐が突発したならば我ら社会主義者は指導者たちが犯した罪を可能な限り早く償い、その間にも何かが、いく時間かが残されているとしたならば、破局を抑止するためにいっそう努力しなければなりません。（略）しかし何はともあれ、市民諸君、殺戮と野蛮にこれほど脅かされた時はなかったのですが、私はこれらの事態について希望の様なものをもって言います。平和を維持し文明を救済するチャンスは、プロレタリアが、フランス、イギリス、イタリア、ロシアのプロレタリアという多数の我が同胞に依拠するあらゆる諸勢力を結集し、それら圧倒的多数の人々にそうすることを求め、我々が彼らの一致した心臓の鼓動で恐ろしい悪夢を退けることしかないと[28]」。

ジョレースは全面戦争が回避可能であり、当面はオーストリア・セルビア紛争の局地化と平和的終息をはからなければならず、議会の関与から国際社会主義事務局の指令の下に双方的に行われる予防的ゼネラル・ストライキにいたるまでのあらゆる手段で国際的仲裁を実現させなければならないと主張した。しかし翌25日にはサンクト・ペテルブルクを訪れたフランスの大統領ポワンカレとヴィヴィアニ首相の支持を受け取ったロシアがセルビアへの支持を表明し、局面は悪化の方向に転換する。セルビアはオーストリアの共同捜査への参加以外すべての条件を受け入れたが、ウィーンはこれに対し大使召還で応じた。事態が深刻化したと判断した国際社会主義事務局書記のカミーユ・ユイスマンスはオーストリアのアドラーとジョレース、ヴァイアンに電報を打ち、国際社会主義事務局を招集するべきかを問い合わせた。ジョレースは補欠選挙の候補を応援するためにリヨンに滞在していた。彼は緊急に事務局を招集するべきであると回答した。翌26日にパリに帰る列車の故障のためにまだディジョンにいて、電報を読んだ

あとで「ユマニテ」編集局に電話をしてドイツ大使がフランスの外務大臣代理にたいして働きかけた正確な意味について問い合わせ、ベルリンはウィーンにまだ働きかけていることを確認した。まだ戦争を回避する可能性があるとジョレースは信じていた。加えて彼はフランスが国防の弱点を相手側に示さないように忠告するのを人は彼から聞いた。ジョレースは翌27日にパリに帰り、フランス社会党常任執行委員会 CAP に出席した。そこで彼はイギリスで紛争当事国オーストリア、ロシア、ドイツ、フランスの調停のための会議が開かれると聞いた。ジョレースはその時「現在の危機のさなかでフランス政府は極めて明確で誠心誠意の紛争の危険を回避し緩和する配慮をしていることを」社会主義者は知っていると宣言する。フランス社会党 SFIO はフランスの内閣が平和のために最善を尽くすように働きかけることを決めた。この日の夕方フランス労働総同盟 CGT は反戦デモンストレーションを8月2日に早めて行うことを呼びかける。しかし社会党はこのデモンストレーションを支持しなかった。翌日「ユマニテ」紙は事態を最小限にしか報道しなかった。フランス労働総同盟は次第にトーンダウンし、翌日の総同盟委員会では活動家の逮捕が囁かれた。開戦時の逮捕予定者名簿「カルネ B Carnet B」[29]の名簿による逮捕が行われるであろうというのである。

7月28日にセルビアはオーストリアの最後通牒を捜査への参加を求める項目をのぞきすべて受け入れたが、オーストリアはセルビアに宣戦布告を行う。この日の「ユマニテ」紙にはフランスとドイツの両党の「自覚したプロレタリアートの平和への揺るがない意志を表明する」ように呼びかける記事を発表した。ジョレースは代表団を引き連れて首相代理のビアンヴニュ-マルタンと面会する。社会党の宣言には第一にイギリスの仲介に究極の希望を託することと「フランスはフランス自身で決定すること」、すなわちフランスはロシアの一蓮托生となる危険を冒すべきではないことの2点を強調した。[30]

第２節　1914年7月29日 -30日の国際社会主義事務局 BSI とジャン・ジョレース

7月28日夕べに国際社会主義事務局 BSI の会議に出席するためにヴァイアン、ゲード、マルセル・サンバ、ジャン・ロンゲ Jean LONGUET[31] とともにブリュッセル行きの列車に乗った。7月29日と30日の2日間ブリュッセルで国際社会主義事務局 BSI の会議がブリュッセルのベルギー労働党の本部がある人民会館 Maison du Peuple で開催される。この会議で差し迫る戦争を阻止する方法とウィーン大会開催をいかに実現するかについて激しい議論が行われる。すでにオーストリアのアドラーとチェコのネメッシュはもはやオーストリアがセルビアに前日宣戦布告したという戦争回避不可能と考えた国際情勢を目の当たりにして、茫然自失の状態にあったのに会議の参加者は驚かされる。アドラーは他の諸国の自国政府への圧力に期待するほかないと述べた。自国での社会民主党の政府との会見であくまで平和を望むが最終的には政府への協力を約束した事実をまだ知らなかった平和主義者のドイツ社会民主党党首ハーゼ HAASE[32] の最後まで平和のために尽力するという言葉にジョレースは希望をつないだ。この国際社会主義事務局 BSI 会議の議事録は前記のジョルジュ・オープト著「失われた大会。第1次世界大戦前夜のインターナショナル」（注（１）参照）の資料として全文掲載されている。

7月29日水曜日午前の会議

この会議にはイギリスからケア・ハーディードイツから党首のフーゴ・ハーゼエとカウツキー、オーストリアからヴィクトル・アドラーとフリードリヒ・アドラーの父子、フランスから前掲の5名、ロシアからはアクセリロード、ポーランドからはローザ・ルクセンブルク、地元のベルギーからはヴァンデルヴェルドとアンセーレ、国際社会主義事務局 BSI 書記のユイスマンスなどインターナショナルの主要メンバー31名が参加した。議長はヴァンデルヴェルドが務めた。報道関係者の傍聴を許可しないことと

ラポポールの委任についての審査など簡単な議事手続きについて決定された後、オーストリア代表のヴィクトル・アドラーが絶望的な心情を吐露する。

「私はあなた方全員が知っていることついて話します。オーストリアの挑発としての通牒はあなた方にとってと同じく我々にとっても驚くべきことを分かってください。外交の展開について私たちは警告を受けるべきです。しかし私たちは戦争を待つしかありません。セルビアがいくつかの相違点を除いてオーストリアの最後通牒の主要な点を受け入れたにもかかわらず、我々は戦争になります。

党は行動することが出来ません（「どうしようもない Wehrlos」の声）。ほかのことを言えば事務局を欺きます。ニュースにだまされるままになることは出来ません。今分かっていることは数年来の階級的なのデマゴーグ的な行動の結果です。人々は街頭で戦争を支持してデモンストレーションをしています。沢山の問題を多様な民族を抱えた我が国の新しい情勢です。この情勢とはいったいなんでしょう。誰もそれを知りません。南スラヴ問題、ボスニアでのセルビア人の不穏な動き、これらはあきらかにすべてセルビアに向かって動いています。我らのセルビアに対する敵意はほとんど自然な成り行きです。個人的に私は全面戦争にならないと信じています。我々はセルビアと訣別したのです。この情勢を我が党に関連させて検討します。我々は危険を回避できません。示威行動が不可能にしています。命を危険にさらし投獄に身をさらします。ともあれ我々はその点をすで通り越しています。しかし組織と報道機関全体が危険になっています。我が国内でセルビアを増長させることは危険ではないのですか。セルビアにオーストリアで革命が起こりそうだと信じさせて大きな責任を引き受けろと言うのですか。こうした伝染病から我らはプロレタリアートを保護しなければなりません。我々は組織を守らなければなりません。ストライキその他の考えは幻想に過ぎません。

問題は非常に重大で我らの唯一の希望は戦争がこれ以上悪い方に行かないように我々だけが犠牲になることです。戦争が局地化しても我が党の状況は非常に痛ましいものになります。我らの敵対者は彼らの成功で力を得て勇気づけられています。我が国でインターナショナル大会が開かれることを喜びました。我々はたゆまずに準備しました。民族の差違なしにこの大会を心待ちにしました。悲しいことですがほかにしようがありません。我らが希望することは事務局が我々を信じてくれることです。我々にはほかにしようがありません。我々は党を救いたいのです。事務局が出来ることと我々が事務局と一緒に出来ることは犯罪者を断罪し、紛争を局地化することです。

我が国の産業は軍事化されています。労働の拒否は軍法で裁かれます。我々はなんとしても大戦が回避されることをのぞみ、それを信じます。我ら全員がのぞんでも多分奇跡を信じることになります[33]」。

これに対しドイツ社会民主党のハーゼは次のように答える。彼は希望を捨てていなかった。

「私は極めて重要な通知を行います。私はこの危機的な瞬間にプロレタリアートに何が出来るかを自問します。もしブルジョワの新聞を信じるならば、プロレタリアートは熱狂的愛国主義者であり続けています。ベルリンから私に送られてきた電文によれば逆のことをはっきりと明らかにしています。

ブラウンの署名がある電文によれば前夜ベルリンで27の超満員の集会と街頭において数千の労働者が戦争に反対し、平和を支持するデモンストレーションを行いました[34]」。

ジョレースはボスニア - ヘルツェゴヴィナとクロアチアの心理状態が知りたかった。「ハンガリー人は戦争を待ち望んでいるのですか」と問いを

投げかけるとアドラーは次のように答えた。

「クロアチア人はカトリックです。セルビア人は正教会教徒です。クロアチア人は王朝にとても従順です。ボスニアでは在住セルビア人は支配的ではありません。クロアチア人もイスラーム教徒もいます。クロアチア人はカトリック聖職者に対し迫害を組織しています。ハンガリーではマジャール人がスラヴ民族に、特にルーマニア人に敵対しています。現在オーストリアを統治しているのは誰でしょう。皇帝は囚われ人です。政治はまったくベルヒトルト BERCHTOLD（オーストリア - ハンガリー帝国外相）とティサ TISZA（ハンガリー王国首相）の影響を受けています。ハンガリー（王国）の国内情勢はさらに不安定です。労働者階級の一部は好戦的考えに引き入れられています。オーストリアの国益から見ればさらにセルビアのボスニアに関する要求を考慮する必要があります[35]」。

ハーゼドイツ社会民主党党首は突然次のことを主張する。

「現在、各自の国を離れていることは困難です。すぐに帰国する必要があります。そのために出来れば今夕に（この会議を）終わらせる必要があります[36]」。

ヴァンデルヴェルドはこれに返答して「あなた方のうち何人かを今夕の集会（シルク - ロワイヤルでの大集会）に出てもらうことになっております。彼らが欠席すれば大きな失望をもたらします」と言った。

さらに続けてイギリスのケア・ハーディーは言う。「なぜ今日終わらせる必要があるのですか。あまり早く終わらせるのは間違いです」。ヴァイアンもさらに続けた。「結論に達するためには我らは何をすればよいのでしょう。少なくとも終了してから帰る必要があります。ともかく今夜か明

日朝に」。ユイスマンスもこう加えた。「ヴァイアンの考えでは今日終了させることはできません。だから明日朝まで審議する必要があります」。

ローザ・ルクセンブルクは別の意見を述べる。

「断固として迅速に行動する必要があります。私たちは（今夕に）デモンストレーションを行う必要はありません。ただ大会について決定すればよいのです。ともかく今日終わるようにこころみましょう」。

ハーゼはデモンストレーションをする必要があるという意見で、「外交官はいつも迅速に行動します。同じようにしましょう」と述べた。

最後にボヘミアのネメッシュが発言する。「アドラーによれば在留セルビア人はボスニアでは支配的でないと言いましたが、真実は逆で、ボスニアの多数派はセルビア人で占められています。プラハでは我らは闘いを恐れていません。現在組織を破壊されることを恐れているのです[37]」。この発言で午前の会議は終了する。

7月29日水曜日午後の会議

午後3時15分に午後の会議が開かれた。ハーゼは次のような提案をする。

「私はインターナショナルが遅くとも次週の終わりにはパリで開催されることを提案します。インターナショナルが生きていることを証明するためです。この大会はすべての国の労働者にすべての国の政治情況に大きな印象を与えます。社会民主主義が無視できない規模であることを証明することが重要です。我々が持つ影響力を行使しましょう。もしパリでロシア人が、オーストリア人が、フランス人、ドイツ人、イタリア人その他が抗議する声を上げれば、私たちの義務を果たしたと我々は満足するでしょう。私たちは成功するか知りません。しかし我々の義務を果たすべきです[38]」。

ヴァイアンはパリでの大会開催を歓迎する。しかしイギリスの代表は大会開催場所には賛成するが期日の変更に反対する。ケア・ハーディーにいたってはロンドンでの開催も歓迎したが、開催場所はパリに決定する。ユイスマンスはアルコール問題や失業、物価高騰の問題を取りやめて、帝国主義の問題と緊急の政治問題に限定し、そして期間を短縮し分科会の設置をとりやめることを提案する。イタリアの代表アンジェリカ・バラーノフは大会を経ずに国際社会主義事務局 BSI が緊急の決定をすることを求めた。

しかしジョレースは事務局が戦争への抗議行動を定め、最高権限を持つ大会が決定するべきだと主張して次のように言う。

「（略）我々は大会を必要としています。その仕事と決議はプロレタリアートの信頼を鼓舞します。大会を開かないことはプロレタリアートに失望をもたらします。ウィーンでは不可能になりましたが、出来る限り早くパリで大会を開くことが我々には必要です。もし明日が可能だったら明日にでも開きましょう。大会の開催は大デモンストレーションによって8月9日に開けます。膨大な数の人々が参加するでしょう。かくしてわれわれは全体が平和の任務に協力するでしょう。[39]」

イギリスの代表が期日の変更への反対に固執するのに対して、ハーゼは緊急の特別な状況に配慮することを求め、事務局が対立点を回避することを求めた。ドイツとフランスがこの紛争に巻き込まれたら両国も参加が不可能となることも付け加えた。ヴィクトル･アドラーはハーゼ案に賛成し、早急の大会開催に賛同し、もしもの場合スイスでの開催も可能だが大デモンストレーションは不可能となると付け加えた。ケア・ハーディーは予定通りの開催に固執したが、ヴァンデルヴェルドの提案で大会を8月9日に開催するか予定通りに開くか議決され8月9日に決定した。大会の議事日程については焦眉の戦争の問題に限定することが決定された。

おわりにジョレースはセルビアの最後通牒への回答を受け入れなかったオーストリアを非難し、オーストリアは戦争をのぞんでいる、小国を壊滅させようとしているとした。

そして彼は主張する。

「フランス政府は平和を望んでいます。政府はイギリスの平和のための調停を支持するでしょう。状況を悪化させないためにロシアに働きかけました。今私たちは新しい不都合な影響力を見守るしかできません。私たちのテーゼは次の通りです。我々は一つの行動をとることも同盟条約によって強制されることもありません。ドイツの同志が平和のためにデモンストレーションをしたことを私は歓喜し、心から感謝します。ロシアに我が国が追従しないとしても、ドイツは我らを攻撃すると信じられています。我々の側に戦争をする下心はありません。私たちはあなた方がそれを確証することを、信頼することをのぞみます。もし我々がこの恐ろしい状況を回避できたならば、我々は満足します[(40)]」。

7月29日水曜日夕べのシルク・ロワイヤルでの大集会とジョレースの最期の演説

国際社会主義事務局の第1日の会議終了後の29日夕べに、ジョレースなど国際社会主義事務局 BSI に参加した社会主義者の大演説会をブリュッセルのシルク・ロワイヤルで行った。ジョレースのほかヴァンデルヴェルド、ハーゼ、ケア・ハーディー、イタリアのモルガリ MORGARI、ロシアのルバノヴィッチ ROUBANOVITCH、オランダのトルーストラ TROESTRA が演説を行った。約8,000人のベルギー人の聴衆が参加し、演説会終了後に街頭デモンストレーションを行った。この時の演説が公衆の前でのジョレースの最期の演説となった。戦争阻止への最後の期待をジョレースと社会主義インターナショナルに託する聴衆は、熱狂的歓呼で彼を迎えた。その全文は今日ベルギー労働党機関誌「ル・プープル」に発

表された議事録などによってその全文をほぼ正確に知ることができる[41]。演説の全文は次の通りである。

「市民諸君。私は我が同胞たちに、フランスの党の同志たちに私が拝聴したどれほどの感激を持って、祖国喪失者 sans-Patrie と非難を受ける私がこの地で受けた歓呼をどれほどの感激を持ってフランスの名前のもとに大革命の記憶の名の下に語ります。

我々はしかしながらこれらの感激をうち捨てるのではなく、戦争のものすごい危機に反対して意志と理性の力を共通のものにしたいのです。

外交が諸国民をまさに狂乱させようとしていると人は言います。昨日4時頃議会の廊下で戦争がまさに起きようとしているとの噂が起こっています。噂は嘘ですが、すべての人の不安を根拠として生まれています。今日国際社会主義事務局 BSI に出席してより確かな電報が届きました。衝撃的事態は起きないであろうと、オーストリアはセルビアを併合しないと約束したと（笑い）、この約束が実現するようにとロシアは待つであろうと人は我々に伝えてきました。

交渉によって人はセルビアのすこしの肉ではなく（笑い）、すこしの血によって満足するようであります。それゆえ平和を確かなものにするためには少しばかりの猶予がいります。しかしヨーロッパはどれほどの試練を被ったのでありましょう。指導者達はどれだけの試練を神経に、人類の良心と理性に蒙らせたのでしょう。

キリスト教が20世紀にわたって諸国民の上を通り過ぎ、100年前に人権宣言の諸原理が勝利を収めたのに、理由がわからぬままに、指導者がそれを知らないのに、数百万の人々が憎しみあうこともなく傷つけあうことは可能なのでしょうか（長い拍手）。

我々の諸都市を幸せなカップルが通り過ぎるのを見ているのに、心ときめかせる男性の傍らを、母親の大いなる愛情によって生き生きとしている女性の傍らを、死が目に見える運命となって歩んでいるのを見える

ように私には思えます。

私をもっとも悲しませるのは外交の稚拙さであります（拍手）。オーストリア - ハンガリーの外交官を見なさい。彼らは大きな成果を成し遂げたところであります。すなわち彼らの責任以外のすべての責任をわかりにくいものにさせました。他国の指導者がモロッコで、トリポリタニアで、バルカン半島で彼らの暴力と偽善の入り交じった最後通牒の乱暴さによっていかに狂気じみたものになったにせよ、ウィーンの軍事的教権的な一派は前面に躍り出たかのようであります（拍手）。

ドイツ皇帝 Kaiser のドイツは昨今の同国の態度を如何にして正当化できるのでありましょうか。もしドイツがオーストリア - ハンガリーの最後通牒を知っていたならば、どうしてこのような振る舞いを容認したのは許せません。もしドイツの公式筋がオーストリアの最後通牒を知らなかったのであれば、世に言う政府の賢明さはどうなったのでしょうか（笑い）。なんたることでしょう。あなた方を結びつけ、あなた方を戦争に導く契約をあなた方は結んでいるのです。そしてあなた方を戦争に行き着かせようとしているのが何かをあなた方は知らないのです！これが君主達の政策だとしたら諸国民の無政府状態はさらに遠くに行き着くのではないかと自問してしまいます（笑いと拍手）。

もし為政者達の心を読むことが出来るならば、本当に彼らがしたことに満足しているとは思えません。彼らは偉大になることをのぞみ、諸国民を奈落の縁に導いていますが、最後になって彼らはためらうのです。ああ、往時は頭を高く上げて疾走し、決然として地面をたたくアッチラの馬は、ああ、まだ飼い慣らせないのでつまずくのであります（喝采）。為政者達のこのためらいを我々は平和を実現するために利用する必要があります。

我らフランスの社会主義者の義務は単純であります。我々は平和の政策を我らの政府に強制しません。彼らはそれを実行しています。私は我が狂信的愛国者の憎しみが強固な意志で頭上にかぶるのを引き受けるの

に吝かではありません。仏独の和解を必ずやり遂げます。彼らの過ちを非難しながら、我が国を称揚する権利を獲得しました。私はフランス政府が平和を望み平和の維持のために尽力していると世界にいう権利を持っています（熱烈な喝采。「フランス万歳」の叫び）。

フランス政府は仲裁のイニシアティヴをとった敬意を表するべきイギリス政府の和平の最良の同盟者であります。そしてフランス政府はロシアに思慮と自重の助言を与えています。我々について言えば、我らの義務は政府が強力にロシアに自重することを主張することです。しかし不幸にもロシアが受け入れない場合は、我々の義務は『我々は一つの条約しかもたない。我々を人類に結びつけている条約である！我らは秘密条約には関知しない』と言います（熱狂的喝采）。

ここにこそ私たちの義務があります。そう述べながら、彼らの政府にオーストリアが彼らの行動を抑制するように要求するドイツの同志と同盟を結びます。そして私が先ほど述べた電報は、部分的にドイツのプロレタリアのこうした意志から由来しているのです。もし自覚した良心をもつ400万の意志に反対して進むならば専制君主になるしかありません（喝采）。

ご覧ください。これらこそ白日の下に明らかになっている、人々をかき回すためにではなく、彼らを平和と正義の成果のために結集するために貢献する社会党の外交はすでに存在すると我々が言うことであります（拍手）。

市民諸君、同じように先ほど国際社会主義事務局 BSI の会議で狂信的愛国主義ブルジョアジーと神懸かりの乱闘傷のある学生達に抗して、10万人のベルリンの労働者が社会党のデモンストレーションを行った詳しい話を受け取る大いなる喜びを我々は受け取りました。

そこにこそ、彼らにのしかかり、彼らの努力にさらなる報償を与える重圧にもかかわらず、彼らは自分たちの頭上に毎年数か月数年の入獄を積み重ねながら勇気を証明したのです。あなた方は私に彼らに対し勇敢

な女性ローザ・をルクセンブルクに賞賛を与えさせてください(ブラボーの声)。彼女はドイツのプロレタリアートの心に彼女の思想の炎を送ったのです。しかし決して昨日彼らがあたえたと同様な貢献をドイツの社会主義者は人類の大義にあたえませんでした。そして彼らは我らフランスの社会主義者になんという貢献をあたえたのでありましょう！

我々は我が狂信的愛国者が何度も『ああ、もし我らがフランスにドイツ流の穏健でおとなしい社会主義者を持ち、ドイツにフランス流の社会主義者を送り込めたならば、心穏やかであるのに！』と言うのを聞いてきました。しかるに昨日フランス流の社会主義者がベルリンにいて、10万人もがデモンストレーションをおこなったのであります（笑い)。我らは求められたドイツ人が、自分の仲間であるとするフランスの社会主義者を、フランスの狂信的愛国者が求めたのでドイツに送ったのです(拍手)。

あなた方は私が労働者階級とブルジョア階級の相違を語るのをお望みでしょうか。労働者階級は集団として戦争を憎んでいますが個人的には恐れていません。しかし資本家達は集団として戦争を賞賛しますが、個人的には恐れているのであります（拍手)。なぜならば狂信的愛国主義のブルジョアは脅威を与える嵐をもたらすとき、彼らは恐れ、社会主義者が戦争を阻止するために騒乱を起こさないでほしいと思うのです（笑いと拍手)。

しかし絶対的支配者にとって地盤が掘り崩されるのです。もし自動的成り行きと初期の戦闘の陶酔で大衆を引き込むのに成功したにしても、戦争の恐ろしさが増していくにつれて、チフスが砲弾の役割を果たすにつれ、死と悲惨が打撃を与えて目を覚ました人々がドイツとフランスとロシア、イタリアの為政者に向かうと、いったい何のためにこれほどの死骸を我々があなたに提供するのかと彼らに問うでしょう。そして引き起こされる革命は彼らに言うでしょう。『うせろ。神と人々に許しを請え』と（喝采)。

もし危機が消え失せたならば、もし嵐が我らを葬り去らなかったならば、私は諸国民が忘却せずに次のように言うことをのぞみます。亡霊が我らを震撼させるために半年ごとに墓から姿を現すことがないように食い止めますと。（長い喝采）

あらゆる国の人間達のもとに、平和と正義の成果をつくりあげましょう！

プロレタリアートは崇高な使命に自覚を持ちます。そして8月9日に何百万ものプロレタリアートが彼らの代表機関によってパリにやってきてすべての国民の普遍的な平和の意志を確認するでしょう（長い歓呼。ホールは総立ちでジョレースに喝采する[42]）」。

7月30日木曜日午前の会議

この日の午前の国際社会主義事務局 BSI 会議は短時間で終わった。

最初にイギリスの代表ブルース・グレーサーBruce GLAICIER から、昨日の会議での討論に失望したケア・ハーディーはいく人かの仲間とともに昨日イギリスに帰国したと報告があった。大会期日の延期に失望したばかりではない。ドイツとフランスに比較してイギリスの代表と党と労働運動が軽んぜられており、今回の戦争の危機についてもイギリスの内閣も労働運動も社会主義運動も労働運動も平和の立場を保持し懸命に運動を行っているにもかかわらず裏切られたということも不満の原因であったと議事録には記されている[43]。

ヴァンデルヴェルドもこのことに触れて次のような発言をしている。

「イギリスの仲間は自分たちが重視されていないとおもう間違いをしました。これは誤解です。イギリスでは立ち上がった弁士が発言権を持ちます。ここでは登録された弁士に議長が最初に発言させます。そして今回の紛争に重要性を持つ国の順に代表が発言するのは当然です[44]」。

そしてヴァンデルヴェルドはハーゼが提案した決議を読み上げる。

「国際社会主義事務局 BSI は7月29日の会議で世界戦争に脅かされたすべての国の代表が彼ら各国の政治情勢について説明するのを今日理解した。満場一致で戦争に反対し平和を支持するデモンストレーションを継続していることと、さらにそれらを強化することをすべての関係当事者のプロレタリアートの義務とする。ドイツとフランスのプロレタリアは今までと同様に世界の平和に危険を及ぼすことをやめさせるために両国の同盟国であるオーストリアとロシアに圧力をかける約束を取り付けるために彼らの全力を使って政府に影響力を行使するであろう。

パリに招集される大会は世界のプロレタリアートの平和への意志の強烈な表明となるであろう[45]」。

この決議案に対してイタリア代表のモルガニ MORGANI から「ところでイタリア人はどうなりますか」と言われカウツキーは「イタリア人とイギリス人は各自ドイツとフランスの努力を支持するであろう」と付け加えることを提案し、ヴァイアンは「すべての中立国の議会に議席を持つ社会党の同志は、紛争の調停による解決に極めて有効に介入できるでしょう」と主張する。ジョレースはこの指摘を決議に入れるよう求める。オランダのトルーストラは仲裁の問題について大会の任務として表明していないことに異議を表明する。アドラーはトルーストラを宥めつつ、この決議を採択して紛争を終わらせようと述べた[46]。

最終的決議文は以下の通りとなる。

「国際社会主義事務局 BSI は7月29日の会議で世界戦争に脅かされたすべての国の代表が彼ら各国の政治情勢について説明するのを今日理解した。満場一致で戦争に反対し平和を支持するデモンストレーションを継続していることと、さらにそれらを強化することをすべての関係当事

者のプロレタリアートの義務とする。ドイツとフランスのプロレタリアは今までと同様に世界の平和に危険を及ぼすことをやめさせるためにドイツはオーストリアに緊張緩和の行動をとるように働きかけ、フランスはロシアに紛争に関わらないように約束を取り付けるように両国政府に圧力をかける約束を取り付けるために、彼らの全力を使って政府に影響力を行使するであろう。一方イギリスとイタリアのプロレタリアは全力でこれらの努力を支持するであろう。

パリで緊急に招集される大会は世界のプロレタリアートの平和への意志の強烈な表明となるであろう[47]」。

ヴァンデルヴェルドは「中立国についてのヴァイアンの提案は今日中にベルギーの内閣首班に個人的働きかけをします。私の見解では公式でないかたちでおこなわれるのが好ましい」と述べ、ヴァイアンは同意した。

ローザ・ルクセンブルクは「国際社会主義事務局 BSI は熱烈にロシアのプロレタリアートの革命的姿勢を賞賛し、世界戦争の脅威に対する最も有効な保障を形作る英雄的な彼らの努力をツアーリズムに対し採り続けることを推奨する」とした決議を提案し、満場一致で採択された。ヴァンデルヴェルドは9日日曜日にパリで再会しようと告げて閉会した。

第３章　1914年7月30日と31日のジャン・ジョレース最後の抵抗

ジョレースは翌日30日の国際社会主義事務局 BSI の会議を終えると終了後に予定されていた街頭デモンストレーションに参加せずに、汽車が出発する2時間ほど「初期フランドル美術館 Primitifs flamands du Musée」で絵画を鑑賞した後に、国際社会主義事務局の会議に参加した4人のフランス社会党の代表たちとともにパリに帰る午後1時すぎの列車に乗った。パリのノール駅に着いたのは4時間あまり後の17時15分であった。ホームに降りるとロンゲは「ル・タン」紙を買い求め、ジョレースに読ませた。同紙にはロシアが23個師団の部分動員を宣言したというニュースが第1面

に書かれていた。ジョレースは「まだすべてだめになったわけではない」と主張した[48]。

しかし事態はもっと進んでいて、この日の午前3時にイズヴォルスキーISVOLSKY駐仏ロシア大使はフランス政府にロシア政府は戦争が目前に迫っているとみていると通知し、ポワンカレは本国にドイツにいかなる攻撃の口実も与えてはならないとの電文を送った。そして掩護部隊を増強し、国境から10キロメートルの距離を置いて配置することを命じていた。ジョレースがパリに到着する1時間あまり前にロシア皇帝はロシア参謀本部の圧力の前に総動員令の勅書を出していたのである。そして労働総同盟CGTのヴァグラム会館での集会開催を禁止していた。地下鉄のすべての出口は警察によって厳重に警備されていた。それでもエトワール広場やテルヌ広場に労働者は結集し、警察の手荒な取り締まりを受け、この日の夕方パリでは各地で暴力沙汰が起きていた。地方諸都市ではブレスト、ブールジュ、リヨン、シェルブールなどで労働総同盟CGT傘下の労働取引所と社会党の呼びかけで数千人規模のデモンストレーションが行われ、戦争阻止を叫んだ。

ジョレースはノール駅で下車した足でサンバとともにパレ-ブルボン（代議院議場）に向かい、議場の鉄柵の前でマルヴィ内務大臣と遭遇する。社会党議員団に集会についての政府の決定を告げたばかりのマルヴィは、ジョレースに出会う前に記者団や議員に「状況は相変わらず緊迫しているが、我々は緊張緩和へと向かうと私には思える。今日の午後にドイツから望外のニュースを受け取った。会談は解決に向かうであろう時が予想できる[49]」と語ったと挿絵入り日刊紙「エクセルシオールExcelsior」紙は伝えている。また同紙はオーガニュールAUGAGNEUR教育相が上機嫌で「私は緊張緩和の予感として仲裁に向かっているように思う[50]」と記者に言ったのを伝えている。

同じく記者からの質問を受けたジョレースは、「ブリュッセル（の国際社会主義事務局BSI会議）で私が報告した確信と私が会談したこと、私

が読んだ公式の電文に基づく確信は四大列強が平和を望んでいると言うことである。私はフランスの平和を希求する気持ちの保証人となった。また私は悲観主義も帰国して私が感じたようなパニックをも抱かない。イギリスの仲介は失敗していないと私は思う。その最初の方法は受け入れられなかったことが判明した。しかし原則自体はドイツに拒絶されなかった。エドワード・グレイ卿（英外相）は真摯な人でぐらつくような人ではないので会談を続行する。ある程度確かな一つの方法を見いだすであろう[51]」と答えた。この後ジョレースはパレ・ブルボン（代議院議場）に入って社会党議員団と会談を持つ。議員団は午後から続けざまに陣取っていたホールにジョレースは入った。また別の記事で「エクセルシオール」紙はジョレースが午後6時に議会の鉄の門扉で記者会見において楽観的な見解を述べ、議会を出ようとしていたヴィヴィアニ首相に鉢合わせした時に、国際社会主義事務局 BSI の行動提起を受けてフランス社会党はセーヌ県連合の合意のもとに国際情勢と国際社会主義事務局 BSI がもとめる行動について説明するセーヌ県の社会党員総会の開催を決定する必要があったと、また8月2日にパリで開かれることになった社会主義インターナショナル大会に先立ってプレ - サン - ジェルヴェPrè-Saint-Gervais[52]で大集会を開催することを決定したと告げたことを報道した。

夜8時に社会党議員団はヴィヴィアニ首相と面会する。社会党ばかりか急進党にまで敵対したブリアンとは違って元社会党の代議士であったヴィヴィアニの平和への努力に対しジョレースは一定程度の信頼を置いていた。ジョレースは首相にフランス政府がドイツの反撃を許すような口実を与えないようにもとめた。首相はこの日の朝の掩護部隊を増強するが反撃の口実を与えないように部隊を国境から10キロメートルの距離を置いて配置する閣議決定を伝えた。しかし首相は駐露フランス大使パレオローグがフランスはロシアに保障を約束する電文を送ったことは議員団に伝えなかった。電文にはロシアの外務大臣サゾーノフに部分動員や総動員の口実を与えないようにもとめる文も書かれていたが、パレオローグがこれを正

しく翻訳して伝えなかったことは、ロシア革命の後に革命政府に公表されて明らかになる。首相の返答にジョレースは一時期安堵する[53]。会見の場を離れるときオート - ガロンヌ県の代議士ベドゥース BEDOUCE に「いいかい、ベドゥース、我々はこれが精一杯だ、フランスが戦争の責任を問われることを回避できるためにこれ以上我々は出来ない」と語ったといわれる。

ジョレースはパレ - ブルボンを離れ、「ユマニテ」紙編集部に行くと、ジュオー書記長を先頭に労働総同盟 CGT 代表が来ていた。ジョレースはヴァイアン、ルノーデル、党書記長のデュブルイユとともに彼らを迎えた。代表団は社会主義インターナショナル大会に合わせた8月9日の集会とは別に、8月2日に大デモンストレーションを行うことを提案しに来ていたのである。ロシアの総動員令が出された今、9日では手遅れになると言うのである。国際社会主義事務局 BSI での約束を理由にジョレースは提案に反対した。大会にはドイツの代表も参加して大集会で演説することをジョレースは期待していたようである。それにこの時まだ仲裁のために外交交渉は数週間続くとジョレースは予想していたので、9日でも遅すぎないと考えていたようである。金属労働組合連合のメラム MERREIM は戦争が不可避だと人々は考えているとして強く開催を求めたが、ジョレースは反論して労組代表を説得した。

ジョレースは編集部をでてにぎやかなレストラン・コック - ドール Coq d'Or で夕食をとった後に、翌日の「ユマニテ」紙に「冷静さが必要だ Sang-froid nécessaire」と題する記事を書くために編集部に戻る。記事を書き上げたジョレースは編集者のランドリュー、エルネスト・ポワソン Ernest POISSON[54]、アメデ・デュノア Amédée DUNOIS とともに異常に暑かったこの晩の涼をとるためにカフェ・ド・クロワッサンにおもむいてビールを一杯酌み交わした。その時ジョレースは予言めいた次のような言葉を発した。

「この戦争は人類の心に潜む獣の情念を呼び覚ますだろう。街角で我々は暗殺されるかもしれない[55]」。

そして運命的悲劇が起こる8月31日にいたる。日付が変わったこの晩の午前1時にメトロの終電に乗り遅れたジョレースはタクシーで自宅に帰る。パッシーの自宅では夏期休暇中は妻のルイーズは別荘「ベスーレ Bessoulet」で過ごすために故郷のタルン県に帰郷していて留守で、長男のルイはヴァル県の友人の家に行っており、長女のマドレーヌが父の世話をして夕食を作っていた。朝に高等師範学校時代の友人で高等師範学校教授となった高名な宗教社会学者のレヴィ-ブリュールから電話がかかってきた。彼は自宅にやってきて戦争の危機について2時間ほど語り合った。午前11時頃に「イギリスとの共同の取り組みで交渉を行う何らかの手段があるのではないかを知るために大臣たちに会いに行く」とこの友人に告げてパレ-ブルボンに向かった。パレ-ブルボンの廊下から会議室に行くとまた社会党議員団の合同会議と社会党常任執行委員会 CAP が開かれていた。ジョレースは労働総同盟 CGT の指導者達との前夜の会合の結論を伝えた。8月9日の大衆デモンストレーションとは別個にあさって8月2日にパリ郊外で集会を持つことを変更しないとしていた労働組合員に対して、社会党組織はこれに加わって集会のテーマからすべての反愛国的な点を取り去ろうとした。サンバ、ジャン・ロンゲ、ユベール・ルージェHubert ROUGER[56]を代表としてマルヴィMALVY[57]内務大臣にデモンストレーションの許可を求めに行ったが拒絶された[58]。朝の8時にウィーンはロシアに対抗して総動員令を発令した。午後1時にはドイツは戦争状態宣言 drohende Kriegsgehfahrstand を布告した。オーガニュール公教育相はエスト（東部）鉄道会社の車両はドイツに差し押さえられ、鉄道と電話通信と道路は封鎖されとのニュースを持ってきた。ジョレースは茫然自失となって怒りを爆発させマルヴィに詰め寄る。イギリスの提案に対する内務省の態度はいったいどうしたのか。内務大臣はフランス政府がイギリスの内閣を出来る限

り支持しているし、事態の重大性にもかかわらず対話は継続すると答えた。ジョレースはどれだけ熱心にイギリスの提案を内務省は支持しているのか詳細を明らかにするように求める。ジョレースは次のように言う。

「ながながとロシアと会話を長引かせてもしようがありません。ロシアに明確な強い調子のことばで言わなければならないのです。差し迫る紛争ではロシアはフランスよりもずっと少ない危険しか背負いません。フランスは本当に最も手荒く決定的な攻撃を受け、こうした状況では、わが国はイギリスが示した道筋を出来る限り突き進むことを同盟国にもとめる権利があると、ロシアに警告する必要があります。ロシアはイギリスの提案を受け入れる必要があります。さもなければフランスはロシアに追随せずに、イギリスの側にとどまるであろうと言わなければならなりません。

もしこの圧力が熱心に精力的におこなわれなければ取り返しがつかないことになり、政府の責任は徹底的に問われることになります。

我が国がなんと自国の利益を守るのではなく自国愛で道を踏み外すロシアの家来となります[59]」。

マルヴィはジョレースの熱意を汲むと約束して立ち去る。

つぎにヴィヴィアニ首相に会いに行くが、午後7時には首相はドイツ駐仏大使フォン・シェーンと会見していて面会できなかったので、かわりに外務次官 sous-secrétaire d'État aux Affaires étrangères アベル・フェリー Abel FERRY がカシャン、ルノーデル、ロンゲ、ベドゥースを引き連れたジョレースと会見する。アベル・フェリーは弱冠33歳の次官で、ジュール・フェリー元首相の甥として知られていた。彼はジョレースの真剣な発言に言い逃れのごまかしをすることは出来なかった。ジョレースは彼に言う。

「用心しなさい。私はあなた方の諸条約の根本について議論する気はありません。あなたがそれらの条約に断ち切りがたく縛られていることを言明するだけで十分です。しかしあなた方がそれらの条約で縛られれば縛られるほど、すべて避けようが無くフランスが戦争に身を投じさせられないようにする最高の保障になることを求められているのを自分に問うべきなのです。これについてあなた方が我が同盟国とあまりに無気力に縛られていることを言わないことを恐れます。同盟国がイギリスから提案されている仲裁をどうして受け入れないのかを、同盟国がオーストリアと戦うことへのあなた方の支持を当てにできないと分からせることをしないことを恐れます。大臣閣下、あなたがあなた方の同盟国ロシアにロンドンがペテルブルクとベルリンに対して提案する仲裁を受け入れさせなければなりません。それは義務であり、それは救国 salut なのです！」

これにアベル・フェリーは大声で反論した。

「しかしジョレース氏、それを私たちが行いますとあなたに請け合います。私たちはイギリスを支持しておりそのことを言葉でロシアに伝えなければなりません。あなたの忠告で手助けする我々の同僚でないことが残念です」。

ジョレースはこれに反論して言う。

「大臣、あなた方はそれをしておりません。しなければならないのに、していません。このような状況であなた方が私たちを戦争に導いたならば、私たちは立ち上がり真実を国民に叫ぶでしょう。あなたはイズヴォルスキー（駐仏ロシア大使）とロシアのたくらみの犠牲者なのです。思慮に欠ける大臣たちを私たちは糾弾します。たとい銃殺されようとも」。

次官は代表団を見送り、最後に出て行ったベドゥース代議士にこう言った。「すべては終わった Tout est fini[60]」と。

ベドゥースはジョレースに駆け寄って「私はよく理解できました」と言い、肩をすくませ、失望の表情を浮かべた。

第４章　1914年7月31日夜のジャン・ジョレース暗殺

第１節　ジョレース暗殺を現場で目撃した証人たちの証言

ケードルセ Quai d'Orsay（フランス外務省）を後にすると、ジョレースとルノーデルとロンゲはタクシーに乗ってユマニテ編集部に向かった。8時少し前に編集部に着いた。

編集部に着くとジョレースは電報に次々と目を通した。アスキス英国首相が庶民院（下院）で行う声明を気にしていたという。編集幹部は夕食をとりに「コック・ドル」にするか「クロワッサン Croissant」行くかで決めかねた末に、ジョレースの意見で「クロワッサン」に決めて夕食をとった。その暗殺の場面はジョレース暗殺犯ヴィランでジョレースの家族側の弁護人を務めた後に首相となるポール・ボンクール PAUL-BONCOUR[61] が発行する挿絵入り週刊誌「フロレアル Floréal」1920年7月31日号に掲載された「ジョレースの暗殺、一証人の話 L'assassinat de Jaurès. Récit d'un témoin」と題されたポワソンの回想から引用する。ポワソンは妻と後でクロワッサンでのユマニテ紙編集者たちの食事の会合に加わった。

「私たちはモンマルトル通り rue Monmartre とモンマルトル大通り boulevard の角に来ていた。しかしそこにははっとするようなコントラストがあった。明かりはほとんどなく普通の人が行き交うこの通りには通行人はまれであった。この通りはレオミュール十字路 carrefour Réaumur まで工事中であった。パリではコック・ドルの向かいの広場からかなりしばしば舗道が工事中であった。カフェ・ド・クロワッサンから数メートルの場所に小さな警告灯があって車の進入を禁止し危険を

警告していた。歩道は通行できた。しかしクロワッサンは輝いていて、暑くて窓は開け放たれていた。仲間たちはそこに来ており、私はドアの近くの人の膝までの高さの縁がある窓から入れた。私は身をかがめた。そこにはカーテンのかげに30センチメートルの今風の窓の下半分のカーテン brise-bise のかげにジョレースがいた。彼らはしかしこのテーブルに座る慣習はなかった。彼は私に背を向けていた。（略）私たちが入るとジョレースは殆ど食事を終えていた。奥の柱時計は9時20分を指していた。仲間は大勢テーブルについていた。ジョレースの右横にはユマニテ紙管理者のランドリウ LANDRIEU[62] がカーテンの前に座っていた。私はそのカーテンの後ろでしばし立ち止まっていた。私の妻はランドリウの右に座り私は彼の前に座った。私の右側にはドイツ帝国議会メッスの代議士ジョルジュ・ヴェイル Georges WEILL[63] がいて、次の席にデュブルイユが、その向かいにルノーデルが座っていた。彼はジョレースの左側にいた。ジャン・ロンゲはもっと遠くの、横の第2の窓の向かいの角に座っていた。私の左にはアンドレ・ルノーデル、ダニエル・ルヌー、ベルトルとデュノアがいた。彼らは仕事を終えて私たちのように仲間と食事をとりに来ていた[64]」。

ジョレースの友人たちが勢揃いしていたのである。

「私が入ると、ジョレースは頑丈で分厚く暖かく包み込む良き手を差し出してきた。彼は頭を彼が夕食をとるテーブルの方に軽く傾げていた。彼は私に幾分和んだ親しい友人の眼差しの大きな目を向けて低い声で『事態は悪化している』とつぶやいた。いくつかの話を彼は興奮しながら注意を向けて聞いていた。しかしクロワッサンはみんなに聞こえるので、内密な話が出来る場所ではなかった。私は彼とヴェイル、デュブルイユ、ルノーデルが交わす会話を体をかがめて聞いた。会話はジョレースが大臣としてきた交渉についてのもので、内務大臣マルヴィ氏の態度

の詳細について及んでいた。それについて何が起きたかを他の友人たちに聞いた。彼らの言葉から事態が飲み込めた。ジョレースはパレ・ブルボン（代議院議場）でマルヴィと会って、交渉の状態と、内務省の態度と彼が頼りにしていたイギリスの仲裁について問いただしたのである。ジョレースは彼に熱心に内務省が提案についてどれだけ支持したか、望まれていた強調と熱情をもって行ったかを明確化して言うように迫ったのである。ロシアに対して平和を維持するために唯一必要な決定的圧力をかける緊急の必要性を、いつもの力をこめて強調した。フランスはロシアに対してフランスだけが最も手荒で決定的な敵の攻撃をこうむるのだと示してイギリスの仲裁を受け入れさせなければならない。フランスはイギリスとの合意を守り続けなければならない。しかしジョレースは首相と会見することを望んだようだが、彼が所用のために外務政務次官のアベル・フェリーに話したのである。ジョレースは信念と雄弁と勇気によって敬愛を受けているようであり、国民の見解とフランスの名誉と彼が話したフランスの運命であった。アベル・フェリー氏はそれゆえに『ジョレース氏があなたの忠告で手助けする我々の同僚でないことが残念です』とまで言った。しかし私に詳細を話す時間がなくて、彼は場を立ち去ったと言った。時間は経過し、そしてこの時間カフェの中での好奇心を持つ人の目がかなり気になるようになった。私の妻はランドリウに『ご覧なさい、みんながジョレースを見ている』と言った。妻は正面の鏡を見ていた。彼女が背にしたカーテン越しに人々は'私がいたと同じ場所に入る前にジョレースを見ようと探しているようであった[(65)]」。

ヴィラン裁判でのマリウス・ヴィプル Marius VIPLE の話に依れば、彼は9時半頃にクロワッサンにいってアヴァス通信社の電報がイギリスのアスキス首相が声明を8月3日月曜日まで延期するニュースを伝え、ジョレースたちを失望させたと言う[(66)]。

ポワソンは暗殺の場面を次のように描写している。

「恐ろしいことが起きた！彼の頭にかかっていたカーテンがたわみ、軽く持ち上げられ、手に持たれたピストルがそっとさし出され、この手だけが彼の脳の20センチメートル後ろに現れた。パン！閃光は、つまり赤い火花は出なかった。葉巻のような煙があった。私は4分の1秒ほど目をこらし硬直し茫然とした。次に2発目が発射されたが、ジョレースはすでにナプキンを手に、まだタルトを唇にして、ルノーデルに寄りかかって倒れていた。私は血を見なかった。彼は殆ど身震いをせずに振り向く動きをする時間もなかった。彼は何も言わず、多分何も考える余地がなかった。私は窓を見た。ランドリウはカーテンを引っ張り、引きちぎった。私は人影に、帽子に、ビールのグラスが顔の上に落ちているのに気付いて、猛り狂う獣のように立ち上がった。まだ騒ぎが起きていなかった静寂の中で悲痛と数百メートル先での形容の出来ない叫びを聞き、力強いどう猛な4語の大声の叫び、金切り声が2度繰り返された。『彼らがジョレースを殺した、彼らがジョレースを殺した！』最初にこの言葉を再確認したのは私の妻であった[(67)]」。

「どこにけだものが、野獣が、襲撃の犯人はいるのだ？ 3秒ほどたって私は自分がどこを超えてドアから出て通りに出たのか分からなかった。2歩のところに人影があった。それは人間、人であり、私はのし掛かっていた。もう同時に暗殺者の襟に手をかけていた。そこで私たちは交番に向かっていた。一方に警官が一人他方に郵便局員と私がいた。彼は自分がしたことに『愚鈍 imbécile 』であった。やつは誰だ、単独だったのか？誰が彼を後押ししたのか？誰が彼に武器を与えたのか？私は彼にそれを聞いたが無駄であった。彼はまったく冷静に、夏用の縞模様の短いコートのポケットに私たちが気にしていた2つ目のピストルを持っていると教えてくれた。私の質問に答えるしかなかった。『何になるんだ』『私はルーヴル学院の学生だ』。ルーヴル学院の学生だって？身分証明書も金もなかった。私は理解不能な電報をポケットから取り上げた。それはメーテルリンクの『青い鳥』のタイプで打った一節であった。警部が

着いて、彼に尋問した。彼の名前を訊いた。一人の新聞の売り子が入ってきて地面に落ちていたニッケル製のピストルを返した。襲撃用のピストルであった。2挺目の暗殺犯から取り上げたピストルは既にテーブルの上にあった。そこには一切れの紙に銃弾が１つずつ並べられていた。警部は動揺し心を痛めて『ジョレースは死去しました』と言った。『亡くなったって！』私は悲痛な叫びで言った。私はのどを締め付けられるような息苦しさを感じて、鉛の小さな小さく極小な塊を飽くまでも見つめた。こんなものが世紀の最も偉大な脳を貫きこの時代で最も高度な思想を殺した。数グラムの卑劣な金属が宇宙の小さな空間に入り込み、彼を我々から殺して奪い、彼を暗殺した。頭脳と思想の中枢に、魂に！そうだフランスの、人類の、社会主義の魂に到達させるためにのみ銃弾は頭脳を襲撃した。彼は喪われた平和の殉教者に他ならない！突然警保局長が何人かの警察の高官とともにすごい勢いで入ってきた。『あゝなんと厳粛で特別な光景を私は見たのだろう』と彼は言った。医師が最終的に死を確認したジョレース氏の遺骸の傍で、長身の士官は、レジオン・ドヌール十字章を身につけた野戦の制服の大尉[68]が動転した様相で目を赤くして到着し、苛立った簡素な動きで自分の十字章をはずして恭しくジョレース氏の胸に付けた。私はこの将校の名前を知りたかった。名前が私の口に出かかったが自制した。私はどこにいるのかを、私の前にいるのがどんな人物かを、特にどのような職務の人物かを思い出した。彼はそれに気づき言葉に表せない表情で叫んだ。『いや違う、私はこの職務をしてはならないのだ』と彼は叫んだ。そして心からの動転した不思議な意味深い2つの大粒の涙が彼の頬に落ちた[69]」。

「ユマニテ編集局の近くには無数の群衆が警官に制止されながら、嗚咽しすすり泣き故人の思い出に耽りながらそこにいた。不幸はパリの街角という街角に知れ渡った。知己の、そして見知らぬ友人や社会党と労働組合の仲間が次から次と駆けつけた。『本当ですか？』と彼らは尋ね『本当です』と答えた。それまでだった。彼らはそこにこわばってとどまり、

新聞を明かりがあるところで見つめた。ユマニテの赤旗は喪章を付けて窓に出された。新聞社はどの部屋も人でいっぱいで女性、男性、青年、若い女性が取り乱して嗚咽していた。社主室で友人たちと再会した。途切れることのない行列であった。沈黙の苦悩、騒々しい苦悩、語り合う苦悩、無言の苦悩、人のあらゆる種類の苦悩の表現があった。そしてその上に、そうだその上にみんなに対するジョレースの限りない善良さの残余 un lambeau が残っていた。悪態や呪いの言葉はなかった。指令の言葉など必要なかった。新聞は彼のユマニテ紙は 明日彼に捧げられる[70]」。

この時ルノーデルが極右紙「アクション・フランセーズ」からの電話に出て彼らが言うジョレースの死に責任はないという悔やみの言葉をユマニテ紙には載せられないときっぱりと断って受話器を切った、とポワソンは書いている[71]。ジョレースの暗殺を示唆するキャンペーンを続けてきた国粋主義政治結社「アクション・フランセーズ」にも動揺が走ったのであろう。

「しかしジョレースの遺骸は最早クロワッサンにはなく、もうトゥール通りの小さな家の自宅に運ばれていた。1,500人ほどの人々は通りで帽子を脱ぎ通路で彼に敬意を表しようとし、車に付き従った。私は彼に最後の別れをしたかった。私たちは彼の家に行った。夜中に我々は総勢ルノーデル、ランドリウ、アルベール・トマとルペール LEPERT と彼の秘書と私であった。明け方3時であった静かなパッシー界隈では皆が寝ていた。我々はジョレースの邸宅の前に来ていた。家には誰もいなかった。門番は『とても良いお方だったのに』としか言えなかった。家事手伝いの女性 la bonne は目を赤くして黙って家に入れてくれた。ジョレース夫人はそこにいなかった。彼女は（故郷の）タルン県にいた。与えられた夏期休暇を過ごすため夫を待っていた。息子は遠くのヴァル県の友人宅に行っていた。娘は先ほどまでいたのだが、知らせを告げた後で精神的危機に陥らないように別の場所に移されていた。ふらつく歩みで私

をしっかりさせるために手を固く握りしめ、我々は死者が横たえられた部屋に入った。比類なく静かな顔の遺骸がそこにあった。彼は苦しまなかったし、まだ微笑んでいるようであった。間近で彼を見つめたが、彼の目はもはや我々を見ていなかった。しかし彼の思想は無尽蔵の思想は至るところにあり、この喪われた人物の性格は顔に現れていた。彼は何よりもすべての上に、殆ど唯一のぞまれた無限の善良さと彼の人類と世界への愛情をあらわしていた。そして私はそこを後にして家に帰った。自分で帰っていた妻がそこにいた。我々は互いの腕で抱きあった。彼女は私に嗚咽しながら先ほどのように繰り返した。『彼らがジョレースを殺した。彼らがジョレースを殺した！』[72]と」。

次に暗殺者ヴィランの裁判での証言を見よう。

まず当時社会党書記長であったデュブルイユの証言から始める。彼は証言する。

「ある時、多分9時半頃におそらくは私たちはそこを離れてジョレースが記事を書く新聞社に戻ろうとしていた時に銃声が鳴り響きました。その時何が起きたのであろうか。私には正確には分かりませんでした。私の視界からは私は武器も銃を放った人物の手も見えませんでした。私は単に銃声を聞き、殆ど直ぐに2発目が続きました。この時私の正確な記憶では私は椅子に座りながら身を引き、両手を挙げざるを得ませんでした。少し経った後に私の右手の平に小さな裂傷を負ったことに気付いたからです。2発目の後に私は椅子から立ち上がって既に長いすに横たわっていたか、少なくとも左側に倒れていたジョレースを見ました。ランドリウの側でも、反対のルノーデルの側でも、彼を最初の手当をしようとしていました。この時カフェでは騒ぎが起きていました。ジョレースの容態がどうなのか正確に人は知りませんでした。彼は亡くなったのか、まだ救えるのか。私たちの仲間は医者を捜すのに懸命になり、医者を待

ちながら大理石のテーブルの上にジョレースを横たわらせ手当を受けるのに良い位置に置こうとしていました[73]」。

次の証言者は上記の回想を書いた全国生活協同組合書記長のポワソンである。彼は暗殺があった夜、クロワッサンでジョレースの右側にいたランドリウの正面に座っていた。

「突然私は半カーテンの後ろ側から白い鉄の先端のようなものに気付きました。つかの間には分からなかったのですが直ぐにピストルであることに気付きました。すぐさま半秒の間をおいて最初の銃撃が、次いで2発目の銃撃がありました。ジョレースは崩れ落ち、撃ちしとめられました。この瞬間に私は叫びを聞きました。私の妻が『彼らがジョレースを殺した』と言ったのでした。私はカフェの外に飛び出し、暗殺犯がいたのを見つけました。私たちは彼を捕まえました。彼は平然としていておとなしく冷静そのもので、多少茫然自失になっていました。彼はコートに手を入れて彼が言った最初の言葉は次の通りでした。『気を付けなさい、私は2挺目のピストルをポケットに持っています』。私たちは彼のコートからそれを取り上げて、警察署まで連行しました。その時私は興奮していたので、悪口が口から出ました。そして私は『なぜジョレースを殺したのだ。どんな理由があったのだ』と言いました。平然として彼は何も答えず、私をにらみ続けました。警察署に着くと私たちは彼のポケットを検査しました。紙くずを、後で彼が言ったのですが差出人名を彼が線を引いて消したか、消ったかした彼の家族から受け取った電報を見つけました。私はこの電報の言葉をもう思い出せません。そしてタイプで写したメーテルリンクの『青い鳥』の2頁を見つけました。私は再び彼に聞きただしました。『ではなぜあなたはこのようなことをしたのだ？』彼の最初の言葉は次の通りです。『私はルーヴル学院の学生です。私がジョレースを殺したのは彼が3年兵役法に反対したからです[74]』」。

ポワソンの後に証人席にたったダニエル・ルヌーDaniel RENOULT[75]は暗殺に先立って被告ではないもう一人の人物が窓からカフェを窺ったことを証言している。彼は証言する。「私が私の友人ジョレースと遠くない窓の正面のカフェのテーブルについた時、暗殺の数分前にある人物が来て窓をのぞきました。一通行人が偶然に見た視線ではありませんでした。この男は少しの間窓をのぞき、そして消えていきました。この男は被告ではありませんでした。彼の人相は予審判事にも証言したとおり被告にはヴィランの人相とはまったく違っていました。彼は茶髪のソフト帽を被った若い大男でした。彼はだから被告にまったく似ておりませんでした。私はこの事実を予審判事に注目するよう言ったのですが、彼は裁判がなすべき捜索に配慮しなかったことが分かりました」と。

ルヌーはこの事実が重大であると考えたのであるが、裁判長は十分な捜査を行ったが結果が出てこなかったと答えた。

ジョレースとともにクロワッサンにいた夫のモーリス・ベルトルMaurice BERTRE（ユマニテ編集部書記）を探しに店の外まで来ていた夫人は唯一の店外での犯行現場の目撃者であったが、彼女は次のように証言した。

「カフェ・デュ・クロワッサンの場所に着いて1分ほどその場に私はいました。その時私はカフェの前にいた一人の人物が左右に体を傾け一瞬の後に彼が突然行動に及んだのを目撃し、2発の大きな銃声を聞きました。私はロンゲが外に出てくるのを見て彼に駆け寄り何が起きたのかを彼に尋ねました[76]」。

暗殺の現場にいたジョレースの直ぐ横に座っていたルノーデルは、その残虐な場面を次のように証言した。

「突然カーテンが窓からかき除けられて、手首が出てきて閃光が放た

れました。ジョレースは私にもたれ掛かり、銃声を聞いて私たちはすぐに危険を感じましたが、しかし私は目標をはずしたと思いました。彼は私の上に倒れ私は両手で彼の頭部を支えました…。私たちが交わしていた会話の微笑がまだ彼の唇にありました。頭部には鉛があっという間に突き刺さりました。私は頭部をさぐると、頭蓋骨から熱い液体が流れ出ました。脳漿は頭髪が密生した頭皮の下に噴出口（ヘルニア）をつくりました。密生していて強い頭髪でした。いくつかのテーブルが手荒に脇によけられて、ジョレースは一つのテーブルの上に横たえられ、私たちは血を拭いました。5分後すべては終わりました[(77)]」。

暗殺現場を目撃した証人の主要な証言は以上の通りであったが、第1次世界大戦が始まると終戦まで徹底抗戦派の立場を貫いたルノーデルはジョレースを「新しい軍隊」をあらわして国民国家の防衛理論を打ち立てた愛国者として描き出した[(78)]。暗殺現場の目撃証人であったヴェイルは暗殺についての証言は行わず、ジョレースがアルザス - ロレーヌ問題の平和的解決を最優先に考えて、過渡的措置としてのドイツ帝国の枠内での自治を支持していたと証言した[(79)]。

第２節　暗殺犯人ヴィランの釈放と事後のヴィラン裁判についての様々な疑惑についての論議

戦争の最中であるという事情や裁判がもたらす可能性がある混乱を恐れたなどの理由で延期を重ねた。その間、第1次世界大戦中を含めて54か月拘置所に収監されていた。ジョレース暗殺裁判はパリにあるセーヌ県控訴裁判所で1919年3月24日に開廷され、29日に結審されて釈放という判決が言い渡された。判決を言い渡す前に裁判長は陪審たちにヴィランはジョレースの故意殺人で有罪であるか、またこの殺人は計画的犯行であったかの2つの質問したという。

判決の場面について裁判記録は次のように書いている。「約半時間後に

審理は再開された。陪審員長は課された2つの質問に対して否定の回答をした。被告は再入廷させられ、裁判長は釈放と宣告した。ジョレース夫人は民事訴訟について費用支払いを言い渡された。ヴィランはゼヴァエスZÉVAÈS[80]弁護士に感情も顕わに感謝して数分後に自由の身になった[81]。」刑事事件の法廷で民事裁判も同時に行う「付帯私訴」の裁判であった民事裁判に敗訴した原告側のジョレース夫人は裁判費用を支払った[82]。

ジョレースの暗殺犯ラウール・ヴィランが犯行に及ぶ上で彼に示唆したあるいは直接影響を及ぼした人物もしくは組織があったのかは裁判の過程で明らかにされず、陪審員の評決の結果無罪にされた。彼の背後関係について様々憶測されたが、暗殺当時に加盟し直接の影響を受けたのは「アルザス - ロレーヌの若き友同盟 Ligue des Jeunes Amis de l'Alsace-Lorraine」（1911年創立）であったこと、かつてカトリック社会運動の団体「ル・シオン le Sillon」に加盟したことが判明している。しかし「ル・シオン」でも「アルザス - ロレーヌの若き友同盟」でも彼は積極的な活動を行った形跡はない。ヴィランは1919年3月25日の第1回審判被告人尋問で、3年兵役法にたいするジョレースの反対運動を暗殺の主要な動機としてあげている[83]。ヴィランは法廷で陪審員に遺伝的精神疾患を病んでいること、自分は政治には関心がないこと、そして陪審員に受けがよい「愛国的」理由で犯行を行ったことを証言してほしいと友人の彫刻家レオ・バルデル Léo BARDELLE に獄中からの手紙で頼んだことが、バルデルの法廷での証言で明らかにされた[84]。また彼はヴィランがバルデルとの会話では話されることがなかった政治に実は関心があり、「アクション・フランセーズ」をいつも気にかけており、その集会に足繁く通っていたとアパートの門番宅で会ったピエール・オーバン Pierre AUBAN の隣人の芸術家の妻から聞いたとも証言している[85]。

ヴィラン裁判が終わった後に、裁判についてのいくつかの疑惑が生じる。予審の裁判記録は紛失していた発見できなかったが、ポール - ボンクール弁護士が裁判の全過程の記録の写しを保持していた[86]。この写しを入手する

ことが出来たジョレース暗殺についての研究家はいくつかの当時からヴィラン裁判について議論されていた疑問点について光を当てている。

第1に、政治的傾向が反動的であるとされるドリウ DRIOUX 判事が裁判長に選ばれたことに疑念が抱かれた。予審があまりに早く結審したため、政府や司法官によって予審の追加がもとめられ控訴裁判所での裁判を遅延させたのではないかと批判された。

第2に、バルデル証人がヴィランの「大の友人 grand ami」と呼んだ、ヴィランの政治的背景について知っていたかも知れない画家のオーバンが証人喚問されなかったことである。前述のように彼と同じアパルトマンに住んでいた芸術家の妻フランシェ夫人 Madame FRANCHET が、ヴィランが「アクション・フランセーズ」との関係をバルデルに伝えているが、オーバンはより詳しくこの事について知っていた思われるし、オーバンの証言を不安に思ってか、ヴィランは獄中から手紙で、オーバンが事情に詳しくないバルデルに証言を依頼すると予告している。また1914年12月12日の警察の報告に「ル・シオン」の創立者サンニェSANGNIER の協力者ユベール・オーベル Hubert AUBERT がヴィランは「アクション・フランセーズ」に加盟していたと書かれていて、警察に召喚された彼は同月12日に「『アクション・フランセーズ』という世界に明らかに所属しているとされる人たちが行ったいくつかの暴力行為を考えれば、ヴィランの犯行はこの政治的党派と一緒だと考え納得している」と証言している。[87] だが彼は一般論で言っただけでヴィランが実際に「アクション・フランセーズ」に加盟していたかどうかは知らないと言っている。しかし補助依頼委員会 commission rogatoire（他裁判所や官署に補助依頼する委員会）の問い合わせたところ、スリベ SRIBER という人物から1915年3月12日付けの返信が来て「ヴィラン某について私は『アクション・フランセーズ』のあらゆる示威運動の活動的メンバーであると最も明確な形で断言できる。明確な証拠を示すことは出来ないが、彼のこのグループへの所属は確かであり、次のような結論にいたった。ヴィラン某は最も明白な形で『アクション・

フランセーズ』に所属していることを否定したし、同グループの機関紙は8月1日号で暗殺者と暗殺を否認した。しかし『アクション・フランセーズ』の青年組織王の売り子 Camelots du roi のメンバーとの以前の会話によって、私はヴィランがくじ引きで彼らに必要と思われる行為を行うように指名され、襲撃により死に至らされるべきすべての人物の訴訟事件を書類に記入して、もし事件が悲劇的事件となって多くの人々から非難を引き起こしたならば、予め嫌疑者はそれまでの仲間に加わっていることを否認し、仲間も彼らの一員であると認めないことが了解されていたと断言する[88]」と書き送ってきた。しかし「共和主義青年 Jeunesses républicaines」の活動家であったスリベはこの情報を多くの急進派の人物やアルメレイダに提供しており、アルメレイダは彼の証言は信憑性がないと一蹴している。情報機関はヴィランが「アクション・フランセーズ」に加盟していたとする情報を確認していない。

第3の問題は、暗殺前日と当日のヴィランと行動をともにしていた人物についての捜査に検察当局が消極的であったことだ。スリベは書簡の中で犯行前日の7月30日22時頃に「カフェ・デュ・クロワッサン」で彼が知っている「アクション・フランセーズ」の2人が綿密に下調べしていたのを目撃したと書いている。この事実についてはルノーデルも同夕方に3人の人物がジョレースたちのグループを凝視しているのを目撃したとしてヴィランに対質をもとめたがヴィランは否認した。同じく「ゲール・ソシアル Guere sociale」紙の3人が10時30分頃にユマニテ編集部の向かいの歩道でヴィランを目撃している。そのうちの1人デュラック DULAC の証言によれば、ヴィランは新聞社に行ってコンシエルジュ（門衛）に質問し、その後2人の人物と話をしていたという。翌日の夕方にジョレースが暗殺された頃に前夜の人物を間違いなく確認したと言っている。彼はドリウ裁判長に召喚されたが、デュラックともう一人のグランディディエ GRANDIDIER は以前アナーキストで、労働運動関係の事件で前科があった。残りのマルク・フランセスの証言だけが採用されることになった。彼

は30日夜に5、6人がジョレースを襲撃する話をしていたと証言したが、問題の人物を特定できず、クロワッサンの店主によって否定された。レジ係のピテ PITTET 夫人はモンマルトル通り側の窓の3人の人物に気が付いて、そのうちの一人は「長身で痩せていて麦わら帽をかぶり濃い色のスーツを着ていた」と言う[89]。ダニエル・ルヌーが公判で目撃したと証言する男は「長身で、褐色の肌の色で、髭はなく、褐色か栗色のフェルトのソフト帽をかぶっていた」ことを記憶にとめている。ベルトルもルノーデルもポワソン夫妻も、そしてヴィプルも暗殺直前にジョレースを凝視していた複数の人物を目撃したが、犯行直後には窓の外にはヴィラン一人しかいなかった。一方、ジャン・サクリエ Jean SACLIER と言う人物が判事に、彼の兄弟アルフレッド Alfred が暗殺時にジョレースの近くにいて暗殺者は2人の人物と一緒にいたのを目撃したという証言を書き送った。アルフレッドは出征していたためにドリウ裁判官に証言できず、兄弟のジャンが訝しい3人の人物が彼の傍に座っていたアルフレッドの証言を認めたという[90]。鑑識係は窓から視界を遮るものはなかったと確認しているが、店主はジョレースが座っていた位置には2つの窓があって第1の窓から室内を見渡せるが、第2の窓の前にはコート掛けがあって、長身か踏み台がなければ見渡すことが難しいと証言している。しかしヴィランは第2の窓から視界には遮るものがなかったと主張している[91]。共犯者がいたという仮説は未だ解明されていない。その他武器や旅費の入手先についても議論されている。

第4に、ロシア駐仏大使イズヴォルスキーがジョレース暗殺に関与したかの問題が議論された。社会党トゥール大会の社共分裂以降フランス共産党員になるジャック・メニル Jacques MESNIL[92] は1920年12月10日号の「ラ・ルヴュ・コミュニスト la Revue Communiste」誌上にジョレース暗殺にイズヴォルスキーが関与したとの説を公表し、ユマニテ紙1922年8月1日号でも再びこの説を繰り返した。彼に依れば、民事裁判の第1弁護士になるはずで1917年に急死したラボリ LABORI[93] は、仏露同盟によってフランスが世界大戦に巻き込まれることに最期まで反対していたジョレースを、ロ

シアの主戦論の急先鋒であったイズヴォルスキー[94]がロシア警察に指示してジョレース暗殺を企てた証拠を持っていると、あるジャーナリストに明言したというのである。ジョレースはヴィヴィアニがロシア外遊で不在の間に外務大臣を代行していたビアンヴニュ-マルタンの部屋から出てきたイズヴォルスキーに偶然遭遇し、彼に「ほらここに戦争の扇動者がいる」という言葉を投げかけ、イズヴォルスキーが聞かないふりをしたが動揺して単眼鏡を落としたという逸話がある。この時点でイズヴォルスキーはジョレース暗殺を計画したとする説を メニルは主張している[95]。この説は共産党の代議士であるヴァイアン-クチュリエ VAILLANT-COUTURIER が1922年7月5日の代議院での演説でも述べている[96]。しかし戦争に協力し、ジョレースを祖国防衛の愛国者として描こうとしてきた社会党の指導者ルノーデルはメニルの主張に反発し、ジョレースがイズヴォルスキーに遭遇した日付は7月31日か早くても30日なのに、すでにヴィランは7月27日にジョレースを暗殺しようとユマニテ社に来ていると「ル・コティディアン le Quotidian」紙1924年2月13日号で反証した。すぐにダニエル・ルヌーは2日後の「ユマニテ紙」2月15日号でルノーデルに反論し、ジョレースがイズヴォルスキーに遭遇した日付など問題にするのは馬鹿げており、すでに暗殺計画は既定の事実であった。むしろ問題なのは暗殺犯をどの党派にも属さない単独犯であり国際的背景などないと決め付けて予審の終結を急がせたことであるとして非難している。因みにいえばヴィランは7月27日にはヴィランは故郷のランスにいたことが判明している[97]。この論争にもかかわらずヴィランの背後関係の議論はその後終息した。

しかしやがて1964年8月20日に「ラ・ヌーヴェル・ルヴュ・ド・ローザンヌ la Nouvelle Revue de Lausanne」誌にソヴィエト政府のスパイとして我が国を含め国際的に知られたベセドフスキーBESSEDOVSKY の4つのコラム記事が発表されると大きな反響を呼んだ[98]。革命後のソヴィエト政府はイズヴォルスキーの件を蒸し返したくなかったようで、スターリンは1925年のジョレース暗殺15年に際してイズヴェスチア紙パリ特派員になっ

たジョレースの友人ラポポールが記念の論文を書く際に、イズヴォルスキーに関する件を忘れるように1927年にパリで採用された外務省職員のベセドフスキーを通じて圧力をかけたと本人が語っている。[99] 加えてこの外務省職員は革命後にソヴィエト政府の側についたイグナチエフ IGANTIEV という帝政期のパリ駐在武官が、1914年7月25日にヴィランにパリへの旅費として5,000フランを支払ったという情報を知っているというが、ラボーはこの自ら諜報員と認めた外務省職員の情報は信用できないとしている。[100] 結局旧帝政期のあまたの秘密条約などを暴露したソヴィエト政府はイズヴォルスキーについての新たな情報を発表していない。

大きな疑問点が残るのはヴィランがどのようにジョレースの自宅の住所を入手したかという点であるとラボーは言っている。[101]

第３節　釈放後の暗殺犯ヴィランの運命的結末

ところで暗殺者のその後の運命について辿るならば、極めて苛酷な運命が彼を待っていたことが分かる。[102] 暗殺者ヴィランは1919年3月29日夕方に釈放された。最初の晩は警視総監の依頼で「ル・シオン」のサンニェが彼に宿を提供した。それからしばらく経ってヨンヌ県県庁所在市オーセル Auxerre に滞在したと言うが、彼がこの町にいることが知れ渡り、この町で彼に対する抗議行動が起きると、1919年4月にオーセルを離れてパリ市内に偽名で身を隠す。

1920年7月19日にパリ郊外のモントルイユ市のカフェで偽造貨幣を使用したとして逮捕された。10月18日に第Ⅺ軽罪裁判所で100フランの罰金刑を宣告された。彼の精神疾患ゆえに罰金刑のみが課されたという。この時は絶望して縊死を図ろうと考えたと「ル・マタン」紙には報道されている。[103] この後に父親のいる故郷のランス市に戻ったが、職も見つからなかったらしい。1921年9月15日にはランス民事裁判所の父親の事務室で自分の腹部に2発の銃弾を発射して自殺を図りがこの時も重傷を負ったが未遂に終わる。[104] 間もなくしばらくして父は亡くなったが、生前に財産を使い果た

していた父は息子には遺産をまったく遺さなかったと言う。ただし1人の叔母が彼に幾ばくかの遺産を遺し、やがてスペインでの生活の糧にした。[105]

ヴィランはその後、パリとランスを漂泊し、ランスの友人宅では過去の暗殺事件を口にして友人の子どもに知られ、追い出されている。逃げるように彼はいくつかの国を訪れる。イタリアに滞在し、講和条約でリトアニア領となる旧ドイツ領の都市メメル Memel（1923年までフランスが管理）を経てダンツィヒに行き、スペインへとたどり着く。もはやジョレース暗殺犯の名は忘れ去られ、ジョレースの復讐をしたと主張したジェルメーヌ・ベルトンの裁判[106]の時に一時期話題に上ったが、その後スペイン内乱の最中で彼が殺害されたと報道されるまで1937年に名前が取り上げられるまで忘れ去られる。その時村の騒擾事件に巻き込まれ呪術師として殺害されたとか、爆撃で殺害されたとか正確な情報が伝わらなかった。[107]

1932年にはじめはタヒチに旅立とうと彼は考えたが、バルセロナで思い直して1932年にスペインのマヨルカ島 Mallorca などで有名なバレアレス諸島 Islas Baleares のイビサ Ibiza 島に身を落ち着ける。当時まだ観光地となっておらず、生活費も安かったのが選択の理由であった。やがてナチスの迫害を逃れたドイツ人やオーストリア人がやって来た。この島で旅行客であった画家ポール・ゴーギャンの孫ポール - ルネ・ゴーギャン Paul-René GAUGUIN と知己の仲になった。画家の孫はこの島の中心都市イビサ市から22キロメートル離れたサン・ビセンテ San Vicente という寒村に住んでいたヴィランの暮らしぶりについて証言を残している。ヴィランは画家ゴーギャンの名前を知って自分のタヒチをここに見つけたと言ったという。彼は最初の名前であるラウールではなく、3番目の名前であるアレクサンドルと名乗っていた。姓がヴィランであることは隠さなかった。彼は自分がジャンヌ・ダルク・コンプレックスで持病だと言っていた。ゴーギャンは彼を反動的でプチブルジョアのフランス人退職者だと思った。「彼の過去については口をつぐみ、旅行したことを話した」と証言している。[108]ヴィランは叔母が遺したお金で海岸から少し離れた中腹に土地を購入し、

画家の孫は家の建築に職人とともに加わったが、金払いが悪いので仕事を辞めて立ち去ったと言う。[109] 建てられた彼の湿った薄暗い家を見て、病的で悪趣味な建物であるが、いざというときに逃げやすいとあるジャーナリストは評している。丘の上に立てられたジャンヌ・ダルクに捧げた礼拝堂は、ただ木の十字架が建てられてあっただけであった。村人は彼を「港の狂人」と呼んだ。しかし彼がジョレースの暗殺者であるとは何人も知らなかった。[110]

数年後に再び訪れたポール - ルネ・ゴーギャンは以前と違って年老いて腰が曲がり、髭を伸ばし、汚れた服装の変わり果てたヴィランを見つけた。[111] スペイン内乱が起こり、当初からマヨルカ島は反乱軍の手に落ち、やがてイビサ島にも上陸し、共和国軍が反撃して戦闘状態に入った。この島にバルセロナから共和国軍が送ったアナーキストの部隊が9月14日 -15日の夜半に彼を殺害する。ゴーギャンはこの夜の出来事について次のように証言する。

「10時頃フェラッカ帆船が民兵を上陸させるために戻ってきた。島の中心都市イビサ市が爆撃を受け誰もが家にバリケードを作り、恐怖を味わった。村人はおそるおそる彼らの厚い壁とほとんど入り口のない小屋の屋根裏窓から何が起きているかをうかがった。ヴィランの家は海岸の後方に位置していて、前方には海岸の人気のないところにあって、港の4、5軒の家があって観察することは容易でなかった。しかし10時頃最も近隣の家の妻たちは、民兵がヴィランを探しに上っていくのを屋根裏窓から目撃している。彼は外出するためには荒縄靴しかなかったので不意打ちで捕まったのであろう。（略）しばらく後に妻たちは銃声を聞いて、『フランス人』が小舟で来た人たちに連れて行かれたとすぐに思った。海岸の砂利浜に血まみれで発見されたのは夜明けになってからであった。喉と胸部に銃口があった。誰も何が起きたのか見た者はいなかった」。[112]

ヴィランは自宅に運ばれ、少年が医者を呼びに行ったが、爆撃のあったイビサ市に呼ばれて誰もいなかった。銃撃された現場を目撃した者はいなかった。14日から15日にかけての夜半に死去した。彼がジョレースの暗殺犯であると判明して殺害されたのか偶発事件であったのかを証明する事実はないと言う。(113)

第５章　ジャン・ジョレース暗殺の背景

ジョレースの暗殺を考える上で、ナショナリスト（国粋主義者）によって繰り返されたジョレースに対する度を超した激しい非難、特に彼の暗殺を主張する言辞である。すでに1904年の「愛国詩人」デルレードによる決闘を求める書簡をジョレースは受け取ってこれに応え、スペイン国境のビアリッツで実際に決闘が行われる。この時には両者には何事もなく終わった。ドレーフュス事件の時期には露骨な形で表明されなかったジョレースの暗殺を呼びかける新聞記事や文書そして脅迫状は、1913年になると後を絶たなかった。それらの文書の繰り返されたテーマはジョレースがドイツに買収されており、ドイツのスパイであり、さらにはドイツ軍の将軍か最高司令官であり、ドイツ皇帝ヴィルヘルム2世の友人であるという荒唐無稽な中傷さえ含まれていた。1913年は「3年兵役法」の年であり、ジョレースは反対運動の先頭に立って行動した。また彼がフランス社会党 SFIO 全国大会や社会主義インターナショナル大会で戦争を阻止する手段として、ゼネラル・ストライキと蜂起を提案し、支持したことがナショナリスト（国粋主義者）には許し難かったのである。

この1913年以降ジョレース暗殺を教唆する文書が新聞記事から通俗小説 roman-feuilleton、そして彼の元に送られた脅迫状に至るまで多数に及ぶ。ジョレースを激しく攻撃した新聞記事を書いた代表的人物としては極右・国粋主義者の政治結社「アクション・フランセーズ」の指導者シャルル・モーラス Charles MAURRAS とレオン・ドーデ Léon DAUDET や元ドレーフュス再審派で極右国粋主義者のジャーナリストでパンフレット作家

ユルバン・ゴイエ Urbain GOHIER[114]が有名である。

「アクション・フランセーズ」の指導者シャルル・モーラスは機関紙の1913年5月21日の「アクション・フランセーズ」紙に次のように書いている。

「ジョレースを忌まわしい議会内の扇動者としてだけでなく、ドイツの買収とフランス反軍国主義の買収の仲介者として喚問しなければならない。（略）国家権力による本格的調査は彼の記事と彼の演説へのドイツの金銭の汚点の規模を明らかにするであろう。革命はジョレース氏を仲介してドイツから来ている。革命はとりわけ国際危機の時に来ている。しかるにバルカン事件は再び悪化している。イタリア人は我が友人だと見せかけようとしているが、彼らは我が手強いライバルである。ギリシア人は我が良き友人で我が軍事顧問団の生徒であるが、深刻な不和の坂を転がりつつある。我々はフリーハンドを他者が言うように乾いた火薬と鋭く磨かれた剣を大いに欲している。安心したまえ。怖じ気という果実で火薬を湿らせ、彼の貴重な炎と太刀で我らの剣の刃をこぼれさせているジョレースがいる。この裏切り者を見逃してはならない[115]」。

1914年7月18日の同紙に同じくモーラスはこう書いている。

「『社会党臨時大会』でのジョレースの行動に先だって汚辱の評価に価する数百もの行動あり、これらを見逃すわけにはいかない。誰もがジョレース氏はドイツであることを知っている。これら2つは同一である。（略）下劣な風習と弑逆の風習。私はジョレースの裏切りそのものであると冷酷に祖国に言う。これらの風俗はフランスの侮蔑へと捧げることであり、それらを実行することを拒絶することは、許すことである。我々が強力な敵に何度も行った言行一致させることである！しかし我々に付き従う忠誠心と意志の硬さと友愛の一貫性は同じ源泉から流れ出る。我らの政策は言葉だけではない。行動の真摯さは思想の現実性と一致す

る[116]」。

モーラスは暗殺という言葉を王政主義者モーラス特有の典雅なレトリックで暗殺を教唆している。

モーラスの偽名説も流布した[117]クリティアス Critias というペンネームの筆者は、カイヨー夫人によって暗殺されたフィガロ編集長カルメットの例を引き合いに出して同紙の7月23日号に有名な記事を書いている。

「我々は政治的暗殺を誰にも下そうと思わない。しかしジョレース氏は戦慄するべきである。彼の記事は熱狂者に対して、見せしめになる方法でガストン・カルメットの運命をジョレースがこうむる『抗しがたい次元』の状況を、何事も変えないかどうかを知るという問題を解決する熱望を唆すことが可能である[118]」。

ジョレースに対して口を極めた激しい攻撃を行い、暗殺さえ先導した「アクション・フランセーズ」という極右国粋主義政治結社についてここで簡潔に説明したい。この当時ファシスト組織や親ナチズム団体は当然ながらこの当時存在しない。彼らはフランスに王政を復古しようと言う王党派の政治組織で、1898年にアンリ・ヴォージョワ Henri VAUGEOIS とモーリス・ピュジョMaurice PUJO という共和派の反ドレーフュス主義ナショナリスト組織として発足したが、間もなく加入したシャルル・モーラスの影響の下で王政復古主義者の政治結社となる。統合的国粋主義 nationalisme intégral とフランス革命への敵対、すなわち反革命主義、反ユダヤ主義、カトリシズムへの帰依を標榜し、「王の売り子」という名の青年組織を有してドレーフュス派など反対派に実力行動を行って恐れられた。第1次世界大戦前夜から反ゲルマニズムの立場からドイツへの敵対心をあらわにし、好戦的プロパガンダを推進して、ジョレースらの反戦平和派を激しく攻撃した。両大戦間には1932年2月6日の騒擾事件の先頭に立った。1940年

の敗戦後にはペタンの「国民革命」に加わって対独協力派として戦後解体されたが後に再生した。

元ドレーフュス再審運動の支持者であり、クレマンソーとともに「オーロル Aurore」紙を編集し、ゾラの友人でもあったユルバン・ゴイエは反ユダヤ主義の思想から特にジョレースの社会主義思想に反感を抱き、彼をドイツに雇われたスパイだと考えるに至る。

ゴイエのジョレースとフランス社会党を攻撃する文書の中でも最たるものは「ラ・ソシアル La Sociale[119]」と題する、表紙にドイツ軍の鉄兜をかぶったジョレースの挿絵を掲げたパンフレットである。序文からゴイエは「社会党という名前の一味は『労働者インターナショナル・フランス支部 S.F.I.O.』と名乗っている。一味の首領はジョレースであり道具はユマニテ紙である。ドイツとドイツ侵略の先導役であるユダヤ人に支えられたこの一味は良き市民が姿を現すような場所をフランスの生活で横取りしている[120]」と述べ、悪口雑言を始める。「統一社会党は首領のジョレース氏と機関紙ユマニテ紙とともに単なるフランス社会とフランスに敵対する国際金融資本とユダヤ政治の陰謀における歯車となっている[121]」。彼に依れば1910年の総選挙で74議席を獲得したが少なくとも半数の票は熱心な王党派かカトリック派であり、ジョレースの議席は不正選挙で勝ち取ったのであると言う[122]。ユダヤ人投機家、資本家を経由してユマニテ紙の株に投資され、ジョレース氏に多額の富をもたらして、ブルジョア化させている。もとよりユマニテ紙の編集者はブルジョア出身で医師や弁護士などが多数をしめ、レノーデルは獣医であると指摘するが、ルノーデルは獣医師の資格を持っているが生業にはしていないにもかかわらず、ユマニテ紙はブルジョア化して安逸な生活を送っていると攻撃する[123]。

ゴイエによれば1910年の鉄道員ストライキは労働者の意志に反しドイツの通牒者であるジョレースによって開始されたと主張する。

「仏独関係が最も切迫した時期にジョレース氏は労働者の意志に反し

てフランスの動員を麻痺させるために鉄道ストライキを謀り開始させた。エスト（東部）鉄道網の鉄道員代表はジョレース氏と彼の共犯者アルベール・トマとの悲劇的会見で語った。労働者はストライキを望まないと。ふたりの代議士はストライキを強行させた。ベルリンからの指令で議論の余地などなかったのだ。戦争が起こりそうであったからだ。『犠牲などかまうものか！』とユマニテ紙編集長は公言した。労働者ストライキ委員会はユマニテ紙事務所に誘き出され、警視総監レピヌに引き渡され獣医でユマニテ紙取締役ルノーデルの兄弟の医務官ルノーデルが議長を務める実態のない委員会に置き換えられたストライキは突発した。ドイツ軍は自由に行動できた[124]」。

これらは荒唐無稽な事実に反する中傷がこのパンフレットでは次々と書き連ねられている。ジョレースは労働運動や社会主義者に対してさえ裏切り者として描かれている。

攻撃の矛先は弟の海軍士官マリー・ジョレースにも向けられる。

「トゥーロンではユマニテ紙の編集長の兄弟である海軍大佐 capitaine de vaisseau マリー・ジョレースが『リベルテ』の遭難を準備していた。この戦艦の爆発は艦隊の強力な艦船を奪ったばかりではなかった。爆発はいくつかの装甲艦を運航不能にし、投錨地の艦隊を『渋滞させ』た。ドイツ海軍の同盟軍のイタリア艦隊は行動が自由になった[125]」。

この海難事故は事実であっても、海難裁判所で責任を問われることはなかったし、ましてや故意に引き起こされた事故でもなかった。ゴイエはさらに続ける。

「ジョレース氏は殺人者であり、20の殺人を扇動し、1000の殺人を擁護した[126]」として、クレマンソーの弾圧政策として有名な警察にドラヴァイユ Draveil とヴィルヌーヴ - サン - ジョルジュ Villeneuve-Saint-Georges のス

トライキ中の砂採取労働者が殺害されたのもユマニテ紙が扇動したという。[127]

これに加えてドレーフュス再審運動の時代にはジョレースの心酔者で社会主義者であったカトリックの詩人シャルル・ペギーCharles PÉGUY もジョレースに対する激しい敵意を示し彼の暗殺を公然と主張した。

ペギーは1900年2月5日号の「半月手帖 Cahiers de la Quinzaine」に発表した「社会党全国大会の準備 la preparation du congrès socialiste national」と題する評論文の中で「彼はすべての真実の現実主義者と同じく心底から哲学者であり心底から詩人である。これらの偉大な資質は彼の中で混じり合っていた[128]」と述べて、ジョレースを心から賞賛していた。しかし1904年に彼から離反して後に彼に対する敵意――それはもっぱらジョレースがドイツ皇帝の手先であるとペギーが考えたことに由来するのであるが――を募らせ、1913年4月22日号の「半月手帖」に掲載された『金（かね）・続篇 Argent suite』では「私は立派な共和主義者である。私はかつて革命家であった。戦争になった時にはもはや一つの政策しかない。それは国民公会の政策だ。隠し立てする必要もあるまい。国民公会の政策とは、ジョレースを処刑場行きの馬車に乗せ、太鼓を連打して彼の大きな声をかき消すことだ[129]」とまで述べて、ジョレース殺害の意志さえも顕わにするに至っている。ジョレースの敵対者には彼の思想に敵対しつつも彼自身には敬意を払った「愛国者同盟」議長の『自我礼賛 le Culte de Moi』の作者モーリス・バレース Maurice BARRÈS のような人物もいた[130]。

結びとして

迫りくる世界大戦の脅威に対してジャン・ジョレースとフランス社会党そして社会主義インターナショナルの反戦平和のための闘いは結局戦争を阻止することが出来ずに敗北し、その代表的指導者であったジャン・ジョレースは開戦直前に暗殺される。第1次世界大戦前夜の国際的情況を回顧すれば、帝国主義とホブスンやレーニンなどによって定義された当時の先

進工業国が世界市場の分割をめぐって角逐を展開していた時代に、世界戦争を回避し阻止する勢力が、当時の社会主義インターナショナルや国際労働組合運動をのぞいて果たして存在したかという問題に直面する。世界市場と植民地を分割する度重なる地域戦争に直面して、1900年に万国平和会議がハーグで開催され、常設国際仲裁裁判所も設置された。この運動を「ブルジョアジーの茶番」と見て過小評価した社会主義や労働組合運動の指導者も存在したが、自力のみで世界戦争を阻止することが困難であるとしたジョレースや彼以外の社会主義インターナショナルの指導者たちは、最後ののぞみを国際的仲裁に託した。しかし常設国際裁判所は第1次世界大戦を目前にして紛争仲裁の表舞台に出て来ることはなかった。そればかりかイギリスの最終的仲裁の努力も実を結ぶことなく、ヨーロッパの大戦は世界戦争へと拡張して、人類に甚大で大規模な人的犠牲を蒙らせた。振り返れば、第1次世界大戦直前には国際的仲裁をもとめるための「ゼネラル・ストライキ」と「蜂起」しか世界大戦を阻止する手段が当時唯一の反戦平和を追求しようとしていた社会主義インターナショナルには残されていなかったのではなかったか。第1次世界大戦前おいても秘密外交の禁止も、国際的仲裁による戦争の回避も、社会主義インターナショナルによって提唱され、社会主義インターナショナル・コペンハーゲン大会での主要な議題となった。しかし列強の世界市場と植民地の分割競争の結果、戦争の脅威は著しく高まり、世界大戦が勃発すると、その前に社会主義者たちの抵抗は蟷螂の斧のように無力であった。[131] 甚大な人的被害を生み出し、これらの多大な犠牲をふまえた教訓のもとに、第1次世界大戦が終局を迎えた時代にはアメリカ大統領ウィルソンが「14か条」で、レーニンが「平和の布告」で示した無賠償・無併合の講和が提示され、終戦後には国際的安全保障維持のために「国際連盟」が結成されることになる。

フランスの第1次世界大戦以降の歴史について見れば、大戦が開戦されてフランス社会党 SFIO はポワンカレが言う「神聖同盟」のもとで祖国防衛のための挙国一致政権に入閣して戦争協力を行う。開戦直後の1914年8

月26日に社会党のマルセル・サンバは公共事業大臣に、ジュール・ゲードは無任所国務大臣に就任した。1916年にはアルベール・トマが軍需大臣として第6次ブリアン内閣に入閣する。しかし少数派であった中間派が終戦直前の1918年の社会党パリ大会で多数派となり、1920年トゥール大会で社共に分裂して、中間派であったリュドヴィク - オスカル・フロッサール Ludovic-Oscar FROSSARD[132] 書記長や元徹底抗戦派であったマルセル・カシャン Marcel CACHIN[133] ユマニテ紙編集長らの新しい多数派はコミンテルン＝共産主義インターナショナルに加盟する。

第2インターナショナルは第1次世界大戦開戦の後にその各国支部、すなわち各国の社会民主党・社会党が敵味方に分かれて自国政府の戦争に協力した責任を問われる。批判勢力の中核になったツィンマーヴァルト左派のボルシェヴィキは「戦争を内乱へ」という戦略を提示してロシア10月革命を起こし、ソヴィエト社会主義共和国連邦を樹立して、第2インターナショナルへのアンチテーゼとして第3インターナショナルのもとに国際共産主義運動を組織した。この運動を主導したあるいは共鳴した人々は、この運動に反対して「古い家」（ブルムの表現）であるフランス社会党 SFIO に残った社会主義者と同様にジョレースについて様々な評価を加えることになる。ジョレースがもし暗殺されずに生き延びていたならば、「神聖同盟」に協力して、愛国的祖国防衛を主張したであろう、あるいは反対に彼はあくまで反戦平和の立場を貫いたであろうと予想する議論と論争が絶えなかった。この議論と論争については本稿の範囲外であるので、別稿でそれらについて叙述したい。

註

（1）HAUPT, Georges; *Le congrès manqué. L'Internationale à la veille de la Première Guerre Mondiale. Étude et documents*. Paris. François Maspero. 1965. p.27

（2）HAUPT, Georges; « Congrès de Stuttgart ». dans *Histoire de la IIe Internationale. Congrès socialiste internationale. Stuttgart 6-24 août 1907*, Tome

16, Genève. Éditions Minkoff, 1985 p.9

（3）HAUPT, Georges; *Le congrès manqué. op. cit.,* p.27

（4）Secrétariat du Bureau Socialiste International; *Huitième Congrès Socialiste Internationale tenu à Copenhague du 28 août au 3 septembre 1910. Compte Rendu Analytique*. Gand, Volksdrukkerij. 1911, p.202

（5）ケア・ハーディー、HARDIE, Keir（1856年 -1915年）。本名はジェームズ・ハーディ。スコットランド出身のランカシャーの鉱山労働者。20歳で鉱山労働組合書記となり、労働組合活動家の活動を理由に鉱山を追われ、社会主義のプロパガンダ活動家としてイングランド北部で絶大な威信を勝ち得た。1893年に結党した独立労働党のブラッドフォード地区での指導者となり、同年ロンドンのサウス・ウエスト・ハム選挙区から庶民院議員に選挙された。イギリス労働党創立者の一人となり1900年に労働党から庶民院議員に選挙され、死去まで連続当選した。1906年に組織された労働党議員団の初代院内総務 whip となる。第1次世界大戦中も反戦平和の立場を守った。HAUPT, Georges; *Le congrès manqué. op. cit.,* p.286

（6）オランダ代表の延期提案の背景にはドイツ社会民主党ケムニッツ大会で大会延期を求めたドイツ社会民主党の意向をくんだと、第2インターナショナル研究者のオープトは見ている。そして大会の延期をのぞんだのは、背景にドイツ社会民主党とチェコの党との対立があったのだと彼は見ている。*Ibid*., p.38

（7）ユイスマンス、カミーユ、HUYSMANS, Camille（1871年 -1968年）ベルギー労働党の指導者で、1905年から1921年まで国際社会主義事務局 BSI の書記を務めた。第1次世界大戦中は中立国のオランダで活動を続け、ストックホルム国際社会主義会議を組織した。戦後に文化教育大臣とアントワープ市長と同市選出の代議士を務めた。第2次世界大戦中はロンドンに亡命してベルギー政府の活動をし、戦後に首相と代議院（下院）議長を務める。*Ibid*., p.286

（8）*Ibid*., p.39

（9）アドラー、ヴィクトル、ADLER, Victor（1852年 -1918年）ボヘミアの裕福なユダヤ人の家族に生まれ、医師となる。1883年のロンドン旅行中にエンゲルスと知り合い、彼の影響でオーストリア社会民主党創立者の一人となり終生党首の地位にあった。戦争中は戦争に協力し、戦後の1918年に共和国政府の外務大臣になる。*Ibid*., p.285

（10）*Ibid*., p.52

（11）*Œuvre de Jaurès*. IX. Pour 1a Paix. V, Éditions Rieder. 1939. p.233

（12）DUROSELLE, Jean-Baptiste; *La France et les Français. 1914-1921*. Paris.

Éditions Richelieu. 1972. pp.58-59

(13) カンボン、ジュール CAMBON, Jules（1845年 -1924年）はアルジェリア総督、スペイン大使、ドイツ大使などを歴任して当時は外務次官の要職に就いていた。ポール・カンボン CAMBON, Paul イギリス大使（当時）の弟である。この時代のフランス外交に大きな影響を与えた2人の経歴等については *Ibid*., pp.20-31, 44を参照。

(14) *Ibid*., p.59

(15) *Ibid*., pp.59-60

(16) *Ibid*., pp.60-63

(17) *Ibid*., p.64

(18) *Ibid*., p.64

(19) *Ibid*., p.67

(20) サンバ、マルセル、エティエンヌ、SEMBAT, Marcel, Etienne（1862年 -1922年）；パリ大学法学部で学士号と博士号を取得し、パリ控訴院付弁護士となる。1893年総選挙で社会主義派の代議士としてパリ18区から当選し、その後も1920年総選挙まで連続して当選した。1895年ヴァイアン派＝中央革命委員会 CRS（後の革命的社会党 PSR）に加入した。サンバはヴァイアン派には属したがセクト主義に反対したことで知られ、他の対立する社会主義諸党派からも信頼を受けた。「王を作れ、さもなければ平和を作れ Faites un Roi, ou sinon faites la Paix」の著者としても知られる。第1次世界大戦開戦後すぐにゲードとともにヴィヴィアニ内閣に入閣し、公共事業大臣を務めた。戦後ロシア革命を支持しなかったが心情には共感した。MAITRON, Jean; *Dictionnaire biographique du mouvement ouvrier français*. Paris. Les Éditions ouvrières. 1977., t.15, pp.152-155

(21) ジョレースが暗殺される1時間足らず前に、ジョレースが平和主義を放棄して国民国家防衛支持へと態度を豹変させたという証言を穏健右派の代議士ピエール・デュピュイはしている。「ちょうどすこしばかり前に労働者インターナショナルのドイツの社会主義者が留保なしに総動員令に従うと決定したことを知り、こうした状況から彼は翌朝刊行される彼の新聞『ユマニテ』紙に夕方『前に avant』」と題する記事を書くところであると言っていた。彼は今決定的になった彼と彼の党の平和を維持する努力の失敗を前にして、フランスが分裂し怯えている印象を敵側に与えることを何としても避けなければならないと言っていた」。デュピュイが賞賛すると「私が示した題名と内容の記事を公表したならば、私は平和主義の偏狭な教条主義者の一人によって不幸にも私は暗殺されるのに身をさらすこと

になります。彼らのうちの何人かは正式な戦争布告と戦闘が始まった後でも暴力と反乱を行うのに吝かではないのです。これらの人々はきっと今後国民国家防衛を考え行動をとる私を許さないでありましょう」とジョレースは言ったと証言する。*Le Monde* le 9 février 1958.

この証言はジョレース暗殺後44年近くたった1958年に証言している点でも、なぜこのような重大な事柄を、ジョレースは穏健右派の議員で大衆商業紙「プティ・パリジャン Petit Parisien」の社主であるデュピュイに打ち明けたかという点でも疑念が残る。その場に10名ほどの議員が居合わせたと言うが、彼らの証言は全くないし、その直後に彼が夕食をとりに行った暗殺現場の「カフェ・ド・クロワッサン」で同伴した「ユマニテ」紙編集者達が最後に聞いたジョレースの見解とも異なる荒唐無稽な証言であるとしか評価しようがない。しかしアニー・クリエジェルは、この証言を以下の研究報告で検討に値するものとして取り上げている。cf. KRIEGEL, Annie; « Jaurès en Juillet 1914 » dans *Actes du Colloque. Jaurès et la Nation*. Organisé par la Faculté des Lettres de Toulouse et la Société d'Études jaurèsiennes. Toulouse. Association des Publications de la Faculté des Lettres et Sciences Humaines de Toulouse. 1965. pp.66-67

(22) ヴィラン、ラウール、VILLAIN, Raoul（1885年 -1936年）マルヌ県ランス民事裁判所書記長の息子としてランス市で生まれた。母親も父方の祖母も精神疾患を病んでいた。彼はランスのコレージュとリセを卒業後の1905年にレンヌ国立高等農業学校に入学、翌年に兵役に就いている。1909年に農業学校を卒業後、6週間農業に従事したあとで実家に帰った。その後1912年までスタニフスキー・コレージュの監督補佐を行いながらバカロレアの準備をした。1914年にルーヴル学院に入学して、7月にジョレースを暗殺した。釈放の後スペインで殺害されるまでの彼の行動については後述する。ヴィランの生い立ち、学業とジョレース暗殺に至るまでの経過は RABAUT, Jean; *Jaurès assassiné. op. cit.*, pp.106-107と特に RABAUT, Jean; *Jaurès et son assssin.op.cit.*, pp.112-123が詳しい。

(23) バルトゥー、ルイ、BARTHOU, Louis（1862年 -1934年）1889年に27歳でバス - ピレネーBasses-Pyrénées 県の代議士に選ばれ、その後連続当選を続け、1922年には同県から元老院議員に選挙される。議会では博識で雄弁な論客として知られ1894年以降いく度も大臣を歴任し、ジョレースの論敵としても知られ、両者は決闘も行った。1934年2月6日事件の3日後に組閣されたガストン・ドゥーメルグ国民連合 Union nationale 内閣で外務大臣を務めた。この年の10月9日にユーゴスラヴィア国王暗殺事件の巻き添えでクロアチア人の暗殺犯に殺害された。

PIERRARD, Pierre; *Dictionnaire de la Troisième République. op. cit.*, pp.28-29

(24) « Discours du Citoyen Jean JAURÈS prononcé le 5 juillet 1914 à Rochefort » dans *Le Bulletin de la Société d'Études jaurésiennes*. 1983, n°.91. pp.4-8

(25) この「ヴェーズ演説」の真偽はこれまで多くの議論を呼んできた。ジョレースが応援に駆けつけた候補者マリウス・ムーテ Marius MOUTET が他者では解読困難なメモを残し、社会党の地方紙にこの演説は掲載された。しかし訳あってか、彼の死後「ユマニテ」紙に掲載されなかった。ジョレースがフランスにも戦争の瀬戸際まで至らせた責任があるとするジョレースの指摘は「神聖連合」に加わった徹底抗戦派 jusqu'auboutistes の社会党員には受け入れがたかったのである。他方講和による和平を望んだ中間派やツィンマーヴァルト派は引用し、同派の樽製造労連は1915年12月に全文を機関紙に掲載した。RABAUT, Jean; *Jaurès assassiné*. Bruxelles. Éditions Complexe. 1984. pp.93-94. このテキストはツィンマーヴァルト左派のフランスにおける組織である国際関係回復委員会の小冊子 Comité pour la reprise des Relations Internationales: *Jean Jaurès et les Causes de la Guerre*. Paris. Siège de la Fédération des Métaux. 1919. から引用している。

(26) *Ibid.*, p.8

(27) *Ibid.*, pp.8-13

(28) *Ibid.*, pp.13-14

(29) この「カルネ B」は開戦時に逮捕する予定の危険人物の約1,500名の名簿である。当初はフランスに居留する危険人物の名簿からなっていたが、間もなくフランス人の労働組合活動家（その多くはフランス労働総同盟の活動家である）と多くはなかったが社会党の活動家も書き加えられた。「カルネ B」については詳しくは BECKER, Jean-Jacques; *Le carnet B. Les pouvoirs publics et l'antimilitarisme avant guerre 1914*.Paris. Les publications de l'Université de Paris X. 1973. を参照。

(30) COMPÈRE-MOREL (sous la direction technique de); *Encyclopédie Socialiste, Syndicale et Coopérative de l'Internationale Ouvrière. Les Fédération socialiste. III*. Paris. Aristide Quillet Éditeur. 1921, p.320 この「県連合Ⅲ巻 *Les Fédération socialiste. III.*」の第2章「悲劇の週。ジョレース暗殺。宣戦布告。国民国家防衛。*La semaine tragique. L'assassinat de Jaurès. La Déclaration de guerre. La défensse nationale*」pp.306-352には第1次世界大戦開戦時のフランス社会党の動向についての詳しい記述がある。特に暗殺直前のジョレースの行動についての貴重な証言を見いだすことが出来る。

(31) ロンゲ、ジャン、フレデリック、ロラン、LONGUET, Jean, Frédéric, Laurent（1876年 -1938年）第1インターナショナルとパリ・コミューン指導者として知られるシャルル・ロンゲ Charles LONGUET とカール・マルクスの長女ジェニーJenny との間の長男として父の亡命先ロンドンで生まれた。パリ大学法学部で学士号を取得したが弁護士業を本業とはせずに、ジャーナリズムと社会主義運動に専念した。当初叔父のポール・ラファルグやエンゲルスの影響でゲード派＝フランス労働党に所属していた。ドレーフュス事件を通して熱烈なジョレース支持者となったが、ミルラン入閣には反対し、ドイツ社会民主党のドレスデン決議を支持し、フランス社会党統一後は常任執行委員会 CAP に入り、生涯委員を務めた。1914年の総選挙でセーヌ県第5選挙区から代議士に選ばれる。開戦後神聖同盟を支持する主流派に属したが、1915年のイギリス労働党主催の連合国側社会主義者のロンドン会議に出席後社会党少数派となり、社会主義インターナショナルの再建を目指す。1918年の社会党パリ全国大会で少数派は多数派となり、党指導部の座についた。戦後敗戦国に過酷なヴェルサイユ講和条約の議会批准に反対した。1920年トゥール党大会で多数派が第3インターナショナルに加盟すると少数派の社会党に残った。1932年の総選挙ではセーヌ県第7選挙区から代議士に再選されたが、1936年に人民戦線総選挙では議席を失った。2年後交通事故で死去した。MAITRON, Jean; *Dictionnaire biographique du mouvement ouvrier français*., *op. cit.,* t. 13, pp.308-310

(32) ハーゼ、ヒュゴ、HAASE, Hugo（1863年 -1919年）1897年から1918年まで帝国議会代議士を務め、1911年にベーベルとともにドイツ社会民主党 SPD 党首に選ばれた。1912年から党議員団団長となり1914年8月3日13人の党議員とともに戦債に反対投票をすると表明したが、翌日党の決定に従って賛成投票をした。反戦派であった彼は1915年党議長を辞任し、1916年3月に戦債に党少数派とともに反対投票をして独立社会民主党を結成した。戦後穏健派であった彼は帝国議会で精神を病む男に銃撃され死去した。HAUPT, Georges; *Le congrès manqué. op. cit*., p.286

(33) *Ibid*.,, pp.252-253

(34) *Ibid*.,, p.253

(35) *Ibid*.,, p.254

(36) *Ibid*.,, p.252-253

(37) *Ibid*., p.255

(38) *Ibid*.,, p.256

(39) *Ibid*., p.257

(40) *Ibi*d.,, p.264

(41) ベルギーの社会党ジャーナリストであるジャン・スタンジェル Jean STENGERS は1914年7月30日のベルギー労働党機関誌「ル・プープル」に発表された議事録を底本にしている。同日「ユマニテ」紙は特任通信員が電話で伝えてきた議事録の要約を掲載しているが、記事内容がほぼ「ル・プープル」と同じであるためこの通信員は「ル・プープル」の編集者であったと見なしている。同年7月31日のルイ・ピエラル Louis PIÉRARD が記録したと言われるベルギー労働党夕刊紙「ル・ソワール」も記事内容が「ル・プープル」の議事録と類似しているが、いくつかの点で異なっているために後で発表された「ル・ソワール」の記事は「ル・プープル」紙を参照していても、いくつかの点で修正している点で有益であるとスタンジェルは指摘する。第3の底本は同年7月30日の商業紙「ランデパンダンス・ベルジュ（ベルギーの独立）L'Indépendance Belge」の議事録で、これまで無視されてきた。前2者の議事録とは独立して作成されたが、客観的である点で評価できるとスタンジェルは評価している。cf. Jean STENGER; « Le Dernier Discours de Jaurès' ». dans *Actes du Colloque Jaurès et la Nation. op. cit.,* pp.101-102

(42) *Ibid*., pp.101-102

(43) *Ibid*.,, p.265

(44) *Ibid*., p.265

(45) *Ibid*.,, pp.265-266

(46) *Ibid*., p.266

(47) *Ibid*.,, p.266

(48) RABAUT, Jean; *Jaurès et son assssin. Paris*. Cercle du Bibliophie. Éditions du Centurion. 1967. p.53

(49) *L'Excelsior*. le 31 juillet 1914, p.2同紙の見出しには「議会の印象。何よりも人々は悲観的であった。マルヴィとオーガニュールは希望の光をもたらした」と書かれていた。オーガニュールは公教育大臣であったが、この時マルヴィとともに記者に国際情勢についての寸評を語っている。マルヴィは急進社会党左派、オーガニュールはヴィヴィアニ首相と同じく元社会党の代議士であった。この時期オーガニュールはヴィヴィアニとともに社会主義共和派に属していた。

(50) *Ibid*, p.2

(51) *Ibid*., p.2

(52) 1913年に歴史に残る3年兵役法に反対する大集会で、ジョレースが演説を行ったパリ北西5キロメートルの地にあった草原の広場。

(53) RABAUT, Jean; *Jaurès et son assssin. op. cit.*, p.55

(54) ポワソン、エルネスト、POISSON, Ernest（1882年 -1942年）県庁職員を父親に生まれ、カーン大学法学部を卒業し弁護士になったが、1906年のデモンストレーションで事件を起こしてカーンでの弁護士活動を退いた。第1次世界大戦前いくどか選挙に出たが落選している。1914年常任執行委員となった。ポワソンは特に生活協同組合の分野で活躍して1911年に社会主義生活協同組合取引所書記長に選ばれ、この組織は1912年にシャルル・ジードの改良主義的生活協同組合と統一して全国消費生活協同組合連盟 FNCC となる。この組織で初代書記長に選ばれ、1921年には国際生活協同組合連合副委員長に選出された。MAITRON, Jean; *Dictionnaire biographique du mouvement ouvrier français., op. cit.*, t. 14, pp.284-286

(55) RABAUT, Jean; *Jaurès assassiné. op. cit.*, pp.68-69

(56) ルージェ、ユベール、ROUGER, Hubert（1875年 -1958年）；ガール県のブドウ栽培農民の家に生まれた彼は家業を継いだが、25歳で事務職に就いた。フランス労働党に加入し、左派社会党 PSDF を経て統一社会党に加わる。1910年の総選挙でニーム第2選挙区から代議士に選ばれ、1914年に再選された。両大戦間にも1924年から代議士を務め1940年のペタン全権委任法に賛成して政治生命を終わらせ、解放後は社会党から離脱した。MAITRON, Jean ; *Dictionnaire biographique du mouvement ouvrier français., op. cit.,* t. 15, pp.96-97

(57) マルヴィ、ルイ、ジャン、MALVY, Louis, Jean（1875年 -1949年）法律学研究のあとで政治の世界に入ったマルヴィは1906年から1919年までロット Lot 県選出の急進党代議士となり、法務政務次官や商工大臣を経て1914年3月17日から内務大臣に就任した。第1次世界大戦中に労働運動を擁護したとして「アクション・フランセーズ」など極右・国粋主義者から特に反戦アナーキストで「ボネ・ルージュ Bonnet rouge」紙を主宰するアルメレーダ ALMEREYDA との関係を攻撃され1918年に政治犯を裁く高等法院 Haute Cour で有罪判決を受けて国外追放を受けた。PIERRARD, Pierre; *Dictionnaire de la Troisième République. op. cit.,* pp.173-174

(58) RABAUT, Jean; *Jaurès et son assssin. op. cit.*, pp.61-62

(59) *Ibid.*, pp.62-63

(60) *Ibid.*, p.64コンペール - モレルの「社会主義百科事典」にはアベル・フェリーはこの言葉をジョレースの手を握って彼に「ああ、終わった Hélas! c'est fini」と直接言ったと記述されている。COMPÈRE-MORE; *Encyclopédie Socialiste. Les Fédération socialiste. III. op. cit.*, p.322 第1世界大戦開戦直前のジョレースの行動については

この著書も参考にした。cf. pp.306-324. 因みにアベル・フェリーは1918年に戦死している。

(61) ポール - ボンクール、ジョゼフ、PAUL-BONCOUR, Joseph（1873年 -1972年）; ロワール - エ - シェル県に生まれ、労働組合の弁護士になった彼は、ヴァルデク - ルソー内閣とヴィヴィアニ内閣の官房長官を務め、ロワール - エ - シェル県（1909年 -1914年）とセーヌ県（1919年 -1924年）、タルン県（1924年 -1931年）の代議士を務めた後に、生まれ故郷の県の元老院議員となった。1916年に社会党に入党し、1931年に離党した彼は、1932年に第3次エリオの陸軍大臣を務めた後、1932年に首相兼外務大臣し就任。1933年に第1次ダラディエ内閣、第1次サロー内閣、第2次ショータン内閣の外相に連続して留任。1938年第2次ブルム内閣の外相に復帰し、1940年のペタン全権委任法を拒否した80議員の一人となった。PIERRARD, Pierre; *Dictionnaire de la Troisième République. op. cit.*, pp.193-194

(62) ランドリウ、フィリップ、LANDRIEU, Philippe（1873年 -1926年）ルアーヴルの富裕な家庭に生まれ、化学者としての研究の傍ら社会主義運動に、そして生活協同組合運動に参加し、ユマニテ紙の寄稿者となり取締役にもなって、同紙の経営再建に貢献した。1920年の社共分裂後1923年まで共産党でユマニテ紙編集の仕事をした。MAITRON, Jean; *Dictionnaire biographique du mouvement ouvrier français., op. cit.*, t. 13, pp.193-194。

(63) ヴェイル , ジョルジュ、WEILL, Georges（1882年 -1970年）ストラスブールの富裕なユダヤ人家族に生まれたヴェイルは、1912年にロレーヌ最初の社会主義代議士としてメッスからドイツ帝国議会に選ばれた。1908年からランドリウの依頼でユマニテ紙の特派員となり、平均月に1度はパリのユマニテ編集部かジョレース宅に来ていた。戦争を予知して1914年夏はフランスで過ごしていてジョレース暗殺に立ち会い、開戦後はフランス側で従軍した。1924年には社会党の議員としてバ - ラン県から当選した。*Ibid.* t.15, pp.337-340

(64) « L'assassinat de Jaurès. Récit d'un témoin » *Floréal, 31 juillet 1920*. p.589

(65) *Ibid.*, p.589

(66) *Le procès de l'assassin de Jaurès (24-29 mars 1919)*. Paris. Éditions de l' Humanité. 1920. p.49

(67) « L'assassinat de Jaurès. Récit d'un témoin » *Floréal, 31 juillet 1920. op. cit.*, p.590

(68) この大尉は「ジョレース暗殺裁判記録」でアンリ・ジェラール Henry GÉRARD 大尉であると記されている。*Le procès de l'assassin de Jaurès (24-29 mars 1919).*

op. cit. p.45ジョレースが「新しい軍隊」を書く際に、ともに軍事理論を研究して、特に民兵制度についての啓発をジョレースに与えた陸軍の若い軍人であった。cf. GOLDBERG,Harvey; *The Life of Jean Jaurès*. Madison, Milwaukee, London, The University of Wisconsin Press. 1968.. p.385

(69) « L'assassinat de Jaurès.Récit d'un témoin » *Floréal, 31 juillet 1920. op. cit.*, p.590

(70) *Ibid.*, p.590

(71) *Ibid.*, p.590

(72) *Ibid.*, p.590

(73) *Le procès de l'assassin de Jaurès (24-29 mars 1919). op. cit.*, p.43

(74) *Ibid.*, pp.44-45

(75) ルヌー、ダニエル、RENOULT, Daniel（1889年 -1958年）セーヌ - エ - マルヌ県の代議員として1907年、1908年、1910年1912年の社会党全国大会の代議員として出席 し た。MAITRON, Jean; *Dictionnaire biographique du mouvement ouvrier français., op. cit.*, t. 15, p.33当時彼はユマニテ紙の編集者であり、1920年の社共分裂以降フランス共産党の活動家となり、レジスタンスで活躍した。

(76) *Le procès de l'assassin de Jaurès (24-29 mars 1919). op. cit.*, p.50

(77) *Ibid.*, pp.89-90

(78) *Ibid.*, pp.90-105

(79) *Ibid.*, pp.79-85この証言に最中に被告側弁護士で元ゲード派幹部であったゼヴァエスからの質問への応答があって興味深い。

(80) ゼヴァエス、ギュスタヴ、アントワーヌ、アレクサンドル、（本名ブルソン）ZÉVAÈS（BOURSON dit），Gustave, Antoine（1871年 -1953年）アリエ県に生まれパリ大学法学部を卒業後、ゲード派＝労働党に加入しジャーナリストと文筆家として活躍した。彼は多くのフランス社会主義の歴史について著書を残したことで知られ、ジョレースの伝記も書いている。1898年にイゼール県グルノーブル第2区から代議士に選出されたが、1902年の総選挙に左派フランス社会党 PSDF から立候補したが、急進党の支持をもらえず落選した。落選を県連合の教条的方針のせいにした彼は離党し、1904年の補欠選挙で当選したが、県連合の内紛で彼は党を除名された。1905年の社会党統一には参加せず、1906年の総選挙では急進党の支持で当選したが、1910年総選挙では落選し以降当選することはなかった。第1次世界大戦中は社会主義共和党に加入し、徹底抗戦派として国民国家防衛を支持し、1917年には右翼政党である国民社会党 Parti Socialiste National に入党し、

1927年の離党した。ドイツ占領下では対独協力派マルセル・デアの「ルーヴル l'OEuvre」誌に協力した。しかし1940年に44名の共産党代議士の弁護士となり、1944年にドイツ軍に逮捕されてフレヌ監獄に解放まで拘留された。MAITRON, Jean; *Dictionnaire biographique du mouvement ouvrier français*., *op. cit.,* t. 15, pp.347-352

(81) *Procès de l'assasin de Jaurès. op. cit.*, p.415

(82) 原告側は象徴的に1フランだけの損害賠償をもとめていたが、家族には民事裁判の費用を負担することになった。しかし民事裁判の弁護士ポール - ボンクールの裁判への参加が可能となり、彼は公判で予審の不十分さを指摘し、事実の究明と解明に尽力した。ただしモーラスやゴイエのジョレースを非難する文書を長々と引用したことによって陪審員の心証を悪くしたとの批判もある。ボンクールが民事裁判の弁護士に依頼された過程について付け加えれば、彼は当初から民事裁判の弁護士に依頼されていたのではなく、最初は辣腕弁護士ラボリ LABORI に決まっていたのだが、彼の急死によってポール - ボンクールが代わりを務めることになったと社会党のジャーナリストであるメニルはいくつかの論文で主張しているのであるが、ラボーはラボリが民事の弁護士を依頼されたという事実はないと否定する。RABAUT, Jean; *Jaurès et son assssin*.. *op. cit.*, pp.223, 228この論争については注（93）を見よ。

(83) *Procès de l'assasin de Jaurès. op. cit.*, pp.24-25

(84) *Ibid*., pp.54-58

(85) *Ibid*., p.54

(86) RABAUT, Jean; *Jaurès et son assssin*.. *op. cit.*, p.213

(87) *Ibid*.,., p.215

(88) *Ibid*., p.216

(89) *Ibid*., pp.218-219

(90) *Ibid*., pp.219-220

(91) *Ibid*., pp.220-221

(92) メニル、ジャック、MESNIL, Jacques（本名ドゥエルショヴェル、ジャン - ジャック、DWELSHAUVERS, Jean-Jacques）（1872年 -1940年）；ブリュッセルに生まれ、ブリュッセル自由大学医学部に入学し、1894年ボローニャ大学医学部に移り、1890年にフィレンツェで卒業した。イタリアでアナーキズムに接近し、フィレンツェに10年ほど滞在し、ルネサンス美術史研究の道に進んだ。1894年以降ジャック・メニルのペンネームで多数の雑誌に寄稿して有名になった。文筆活動を通じ

てロマン・ロランと長い交友関係を結び、ツィンマーヴァルト派に加わり、1918年にユマニテ紙編集部に入った。1920年の社会党トゥール大会での社共分裂では共産党に加わったが、クロンシュタット水兵反乱鎮圧を見て「プロレタリアート独裁」に失望して1924年にユマニテ編集部から追放され、モナットの「プロレタリア革命」紙に接近し1938年まで寄稿した。 1939年に最愛の妻を喪い、翌年に憔悴死したか自殺したらしい。 MAITRON, Jean; *Dictionnaire biographique du mouvement ouvrier français. op. cit.,* t. 12, pp.135-136

(93) ラボリ、LABORI（1860年 -1917年）；ドレーフュス事件のゾラ裁判とレンヌ再審で有名になった弁護士で、後者の裁判の中途で暗殺犯に襲撃され、危うく一命を取り留めたことでも知られる。ラボーは家族の証言と「回想録 Mémoires」（そのような著書は存在しない。後述の遺稿集のことか）を根拠にラボリがジョレース暗殺事件民事裁判の弁護士を引き受けた事実はないと断定している。*Ibid.,* p.228 彼が遺したノートを娘のマルゲリト・ラボリが編集した遺稿集にもその事実についての記述はない。LABORI, Marguerite; *Labori,ses notes manuscrites, sa vie.* Paris. V. Attinger. 1947. ラボーは1967年の「ジョレース研究協会会報」の小論「消え去らない伝説：ジョレース暗殺の計画者イズヴォルスキーUne Légend tenace: Isvolsky, organisateur de l'assasinat de Jaurès」で「実際、予審のはじめに民事について弁護するために指名されたのはデュコ・ド・ラ・アイユ Ducos de la Haille であった。ポール - ボンクールは補強するために1919年に就任をもとめられた」*Bulletin de la Société d'Études jaurésiennes.* n°.25. avril-juin 1967. p.15, と書いている。この小論は彼の同年に出版された著書「ジョレースと彼の暗殺者 Jaurès et son assssin」の222頁 -228頁とほぼ同文であるが、後者の著書にはこの記述はない。また「ヴィラン裁判の予審が真剣に行われたのは嘘である」p.228とする「会報」の記述も削除されている。「会報」の小記事より著書「ジョレースと彼の暗殺者」後に上梓されているので、「会報」の小記事のいくつかの箇所は不適切として著書では削除されたと筆者は判断した。しかしメニルの記事以外にラボリがヴィラン裁判の民事部門の弁護士を引き受けたことと、同弁護士がイズヴォルスキーの暗殺への関与を示す証拠を持っていたこと、そして証拠自体の内容を示す文書を見つけ出すことは出来ない。

(94) かつてボスニア - ヘルツェゴヴィナのオーストリアによる併合の問題でボスポラス海峡通行権を約束して守らなかったオーストリアのフォン・エーレンタール von AEHRENTHAL 外務大臣にだまされたと思いこんでいた当時のロシア帝国外務大臣イズヴォルスキーは、オーストリアとの戦争に積極的であったと言われ

る。この事件についてジョレースは1914年7月31日午後のパレ・ブルボンの「キャトル･コロヌ会議室」で大勢のジャーナリストに対して「オーストリア - ハンガリーの外務大臣がボスニア - ヘルツェゴヴィナ併合の代償に4,000万の『チップ』を払う約束を守らなかったせいで戦争になるのでしょうか？このために我々はヨーロッパ諸国民の血を流すでしょうか？」と語ったと友人のシャルル・ラポポールは「ベルナー・タクヴァハト（ベルンの衛兵）Berner Tagwacht」の1915年7月31日号に書いており、この記事は次のパンフレットに引用されている。cf. Comité pour la Reprise des Relations Internationales; *Jean Jaurès et les Causes de la Guerre. Discours prononcé à Lyon-Vaise, le 25 juillet 1914. op. cit.,* p.15この小冊子はツィンマーヴァルト派の組織である国際関係回復委員会が戦争に協力した社会党多数派を批判するプロパガンダのために出版した文書であり、前記のジョレースが戦争へと導こうとしている各国の責任を追及した「ヴェーズでの演説」全文を掲載している。

(95) イズヴォルスキーはフランスを主戦論に傾かせるためにマスコミをはじめとしてあらゆる工作と買収を行っていたが、ジョレースはこれをはね除け、翌日のユマニテ紙にイズヴォルスキーによってロシアがフランスを戦争に巻き込む工作を弾劾する記事を書くことを阻止しようとしたとメニルは1922年8月1日号に書いている。« Jaurès et Isvolsky ». *l'Humanité. le 1er août 1922.* p.1

(96) *Journal officiel de la République française. Débats parlementaires. Chambre des députés. le 6 juillet 1922.* p. 2334 ヴァイアン - クチュリエはイズヴォルスキーのポワンカレ前大統領を含め各方面に行った工作について追及したこの演説で、この事件に触れて次のように言った。「ところでジョレースが予見したようにロシアが総動員したときにフランスは参戦しました。ジョレースがイズヴォルスキー氏について話したのはこの時が最後でないことを多分あなたは覚えているでしょう。彼が暗殺される少し前に最期の努力を試みていた時に外務大臣のロビーから出ようとすると『私はイズヴォルスキーの奴に遭遇した』と言ったのです。そして私たちの多くの仲間はこの日に彼はジョレースの死刑判決に署名したと思っているのです。」

(97) RABAUT, Jean; *Jaurès et son assssin.. op. cit.,* p.228

(98) *Ibid.,* p.226. FICHTER, Jean-Jaques; *Le socialism français: de l'Affaire Dreyfus à la Grande Guerre.* Gèneve. Librairie Droz. 1965. p.207 note 3. フィシュテルはベセドフスキーの記事を「センセーショナルな暴露」と称している。この情報の真偽についてはコメントしていない。

(99) RABAUT, *Jean; Jaurès et son assssin.. op. cit.*, p.226

(100) *Ibid.*, pp.226-227, 228 ベセドフスキーは後にソヴィエト政府と離反して自らのスパイ時代の経験を明かしており、この種の筆者の暴露情報は全面的には信用できないとラボーが疑念を抱いたのには無理からぬ事である。

(101) *Ibid.*, p.228

(102) ヴィランの釈放後の詳細な行動と彼の殺害の経緯についてはRABAUT, Jean; *Jaurès et son assssin.. op. cit.*, pp.201-212を参照。

(103) *le Matin, le 20 juillet* 1920. p.2 この新聞記事によれば縊死による自殺（首つり自殺）をしようとしたと本人は述べたと言うが、釈放後のヴィランの行動について述べたRABAUT, Jean; *Jaurès et son assssin.. chapitre L'assassin assassin. op. cit.*, には記述がない。未遂でさえなく本人が新聞に語っただけだからであろう。

(104) *le Matin, le 16 septembre 1921*. p.1 この事件はヴィランが自殺未遂でかなりの大けがを負ったというマタン紙の一面記事で報道された事件であるが、同じくラボーの著書RABAUT, Jean; *Jaurès et son assssin. chap. L'assassin assassiné. op. cit.*, にはこの事件について書かれていない。父親が彼を無理矢理結婚させようとしたのに抗議いての未遂事件だと記事には書いてある。

(105) RABAUT, Jean; *Jaurès et son assssin. op. cit.*, p.202

(106) ジェルメーヌ・ベルトンGermaine BERTON（1902年-1942年）は、アナーキストで極右団体「アクション・フランセーズ」を憎悪して同組織の総帥レオン・ドーデをジョレース暗殺の復讐をするために殺害しようとするが見つからず、同組織青年部のリーダーであるマリウス・プラトーMarius PLATEAUを射殺して裁判にかけられた事件。当時大きなセンセーションを呼んだ。ベルトン裁判については関連する注（117）も見よ。

(107) RABAUT, Jean; *Jaurès et son assssin. op. cit.*, p.203

(108) *Ibid.*, pp.204-.205

(109) *Ibid.*, p.206

(110) *Ibid.*, pp.206-.207

(111) *Ibid.*, p.208

(112) *Ibid.*, pp.210-.211

(113) *Ibid.*, pp.211-.212

(114) アレクサンドル・クロワは彼の著書「ジョレースと彼の誹謗者」の中で「ユルバン・ゴイエほど反論の余地なく最も熱狂的な誹謗者であった。およそ1900年から1924年まで喧嘩腰が緩和されたことがあったとはいえ、休むことなく彼を貶め続

けた」と言っている。CROIX, Alexandre; *Jaurès et ses détracteurs*. Paris. Éditions du Vieux Saint-Ouen. 1967. p.165

(115) *l'Action Française. le 21 mai 1913*. p.1

(116) *l'Action Française. le 18 juillet 1914*. p.1

(117) クリティアス Critias という偽名でこの記事を書いた筆者は「チボー家の人々」の中でマルタン・デュガールがモーラスの手になると書いている。MARTIN DU GARD, Roger: *Les Thibault*. Gallimard, coll. « Folio », t. Ⅲ, *L'été 1914*, 1980 (1936), p.269-270. 一方ジョレースの研究者ラボーは「ジョレースと彼の暗殺」でレオン・ドーデを筆者としている。RABAUT, Jean; *Jaurès et son assssin. op. cit.*, p.31 アクション・フランセーズの総帥シャルル・モーラスは彼の新聞「アクション・フランセーズ」紙の1924年10月29日号で、ユダヤ系フランス人のヴィクトル・バッシュVictor BASCH がこの記事を書いたクリティアスはモーラス自身であると指摘したのに対して、クリティアスは自分の秘書で第1次世界大戦で戦死したアンリ・セルリエ Henry CELLERIER であると反論している。*l'Action Française. le 29 octobre 1924*. p.1彼がセルリエに書かせたか、自分で書いたのかは本人が戦死したので知るすべがない。ラボーのドーデ説は資料的根拠が示されていない。なおモーラスはさらに「ジュルナール・デ・デバ」紙1923年12月20日付けのアナーキストの女性ジェルメヌ・ベルトンによるマリウス・プラトー殺害の裁判に関する記事 *Journal des Débats. le 21 décembre 1923*. p.2に反論する同月21日の日付がある書簡の中で、前日の同紙の報道は間違いで、クリティアス名の記事を書いたのは自分のではなくアンリ・セルリエであると再度弁明している。*Journal des Débats. le 22 décembre 1923*. p.2 ベルトンはジョレースとアルメレーダ ALMEREYDA の復讐をするためにレオン・ドーデの命をねらったが発見できず、アクション・フランセーズ軍事部門の責任者プラトーを殺害した。独房の中で死体で発見されたアナーキストのジャーナリストであるアルメレーダは暗殺されたとドーデは手記に書いている。モーラスの2回にわたる反論はいかにクリティアスの記事を気に病んでいたかが伺えて興味深い。

(118) *l'Action Française. le 23 juillet 1914*. p.3

(119) GOHIER, Urbain; *La Sociale*. Paris.Dans les Librairies Françaises. 1914 この小冊子の題名について「政治に、政治経済学に、教育に、モラルに関係するすべての問題は今日『社会』問題であり、すべての法は『社会』法である。誰もが各人の様式で社会主義者であり、ある種の社会主義を実践している」と序文で書いている。*Ibid.*, p.7

（120）*Ibid*., p.7-8

（121）*Ibid*., p.19

（122）*Ibid*., pp.16-19

（123）*Ibid*., pp.28-39

（124）*Ibid*., p.54.

（125）*Ibid*., p.54

（126）*Ibid*., p.156

（127）Ibid., p.156

（128）PÉGUY, Charles: « La préparation du congrès socialiste national ». *Cahier de la Quinzaine. 2e cahiers de 1er série.le 5 février 1900.* p.38

（129）PÉGUY, Charles: « Argent suite ». *Cahier de la Quinzaine. 9e cahiers de 14eme série. 1913.* dans *Œvre en prose 1909-1914*. Paris. Gallimard. « Pléiade ». 1961. p.1240

（130）国粋主義者の総帥バレースはジョレースに敬愛の念を抱いていた。彼はジョレース暗殺の翌日に弔辞を携えてジョレースの自宅を訪れており、彼の日記『我が手帖』に「何という孤独が彼の回を取り巻いていたことか、彼のいくつかの欠陥もものかは高貴な人物であり、我が信仰であり偉大な人物であったことを私が良く知っていたこの人物の回りを。さようならジョレース。私は自由に彼を愛することが出来るようになることを望んでいた！」と書いている。BARRÈS, Maurice; *Mes Cahiers*. dans *Œuvre de Maurice Barrès*. tome Ⅷ. Paris. Au Club de l' Honnête Homme. 1968. p.202

（131）第1次世界大戦前の時代の社会主義諸政党はどの国においても政権を未だ掌握していなかった。しかしロシア革命によって初めて政権の座に着く。ひとたび権力を手中にすると国民国家を守るために軍事力を持つことが不可避になり、戦争の主体になることも国際情勢次第では避けがたくなる。ましてや「プロレタリアート独裁」のソヴィエト国家は、反対派を封じるために国内でも強権的政治を行うに至る。議会制民主主義に立脚する社会民主主義政権でさえ、軍事力を保持することは是認されてきた。コペンハーゲン大会で完全非武装を唱えた北欧のいくつかの社会民主主義政党も政権に就くとこの政策を維持できなかった。ホロコーストを経験したユダヤ人でもイスラエル共和国を樹立した後のいくどもの中東戦争がおこなわれた歴史はそのきびしい現実を如実に物語っている。

（132）フロッサール、リュドヴィク - オスカル、FROSSARD, Ludovic-Oscar（1899年-1946年）。小学校教員であったフロッサールはロンシャン Ronchamp 市の市長と

なり、社会党の活動家であった彼は1920年のトゥール大会で共産党に入党した。しかし1923年に「社会共産同盟」を結成し、翌年度に社会党に復党した。1928年以降マルティニークからついでオート - ソーヌ県から代議士に選ばれ、1936年からは社会党を離党し、第2次ダラディエ内閣と第2次ブルム内閣の国務大臣になるなど幾度か大臣を務めた。PIERRARD, Pierre; *Dictionnaire de la Troisième République. op. cit.*, p.132

(133) カシャン、マルセル、CACHIN, Marcel（1869年 -1958年）カシャンはボルドー大学で哲学の学士号をとり、教授となった。ゲード派 = フランス労働党 POF の書記になり、統一社会党 SFIO ではプロパガンダ代表に、1913年ユマニテ紙の編集長となる。1914年セーヌ県から代議士に選出され1932年まで代議士を、1936年から1940年まで元老院議員をつとめた。第1次世界大戦が始まると徹底抗戦派となり、イタリア参戦を交渉するためにムッソリーニと会談し、1917年に戦争継続をもとめるためペトログラードのケレンスキーものとに送られた。1918年からユマニテ社社主になりモスクワで第2回コミンテルン大会に参加してレーニンと幾度か会見した。1920年のトゥール大会では多数派議案を提出し、多数派はコミンテルンに加盟する。フランス共産党では中央委員ついで政治局委員となり、人民戦線結成のために尽力した。フランス解放後に3度議員に選出された。*Ibid.*, pp.49-50